

[翻 訳]

朝河貫一とIALA(アメリカ合衆国・国際補助言語協会)

——日米共同「知的作業(プロジェクト)」の一大実験——

石川 衛 三

はじめに

本稿は、日本の誇りうる第一級の国際人たる歴史家（比較法制史）・イェール大学名誉教授・故朝河貫一博士（明治6年～昭和23年）の、アメリカにおける「国際補助言語運動」への関わりをリアリスティックに再現する関係書簡（集）の訳出である。その交信相手は、ニューヨーク市のコロンビア大学に事務局をおくIALA（International Auxiliary Language Association）「アメリカ合衆国・国際補助言語協会」という名の、その顧問と理事にはそれぞれ13～4名の政界・学界の大物を擁する組織の中心的存在たるアリス・V・モリス夫人なる人物であり、その交信関係は1923（大正12）年～1947（昭和22）年の24年間にわたり、その現存書簡群はモリス夫人発信分48通と朝河氏発信分35通、合わせて全83通（英文）に及ぶ。以下に、その梗概を辿りうるとされるハイライト的書簡を年代順・対訳（日・英語）式に配列するが、朝河氏の発信文は13通で、モリス夫人発信のものは9通、計22通である。

ちなみに、ここにいう「国際補助言語」とは、何よりも言語的覇権を排し、以って言語的平等主義と国際的平和主義をその理念とする、中立・公平で、且つ学習が容易であることを標榜する、国際的コミュニケーションのための、かのポーランドの外科医・ザメンホフ（ユダヤ人）の考案による「エスペラント」（＝夢をもつもの）に代表される人工語の呼称である。

ところで、以下の往復書簡を通読して感じられることは、第一に朝河氏の流麗なる達意の英文がまず印象的である。そこには氏一流の学識と識見に裏打ちされた行文の‘明晰なる論理’と迫力ある‘レトリックと説得力’——そして‘洞察力’——がめくるめく展開される。そして第二には、相対（あい・たい）するアメリカ側の理想と知性（と信念）の人アリス・V・モリス夫人の、朝河氏に対する崇敬にも似た傾倒と信頼感が、これ又印象的である。この——陰陽・男と女——両者の織りなす二重奏は、人類の夢・国際補助言語運動の消長を象徴する葬送曲にも似て、哀愁をさそう余韻を残す一方、その

真摯(しんし)な知的営為ないし模索は、人類史におけるモニュメンタルなドキュメントたるを失わず、第三者的にそれは、日米共同「知的作業(プロジェクト)」の一大実験であり、あだ花であった、といえなくもない。いずれにしても知的な興奮をさそう、心躍る丁丁発止(ちょうちょうはっし)のダイアログ集である。

- ① モリス夫人-1 1923(大正12)年10月17日(ニューヨーク東70番街19, 国際補助言語協会)〔自筆原本・イエール大学図書館所蔵〕

親愛なる朝河教授

オハイオ州アンティオーク大学のモーガン学長が、主人と私に次のようにおっしゃいます。学長も含めて私どもが関心をもっています国際補助言語運動の最近の動向に、朝河教授が多大の興味を示されるやも知れぬので、この際お会いしてみてもどうかと。実はこの28日から当分、各週末に非公式な一連の会合を私たちが予定していますので、ご都合を見て、ご足労でもニューヘイヴンから、そのいずれかの会合にお越しいただき、ゲストとして私たちの家に一泊していただけたら嬉しいのですが、いかがでしょうか。活動のプログラムを同封してみます。じっくりと時間をかけて思考を重ねていくつもりです。私どもと一緒に——引き続きずっと——考えて頂けましたらまことに有り難く存ずる次第です。

敬具

アリス・V・モリス

(デイヴ・H・モリス氏夫人)

19 East Seventieth Street

New York

Oct. 17, 1923

Dear Professor Asakawa,

President Arthur E. Morgan of Antioch College, Ohio, suggests to Mr. Morris and me that you might be much interested in the developments that have recently taken place in the International Auxiliary Language movement, in which we are interested with him & others, and that it would be a mutual pleasure for us to meet. We are having a number of week-end gatherings of an informal nature beginning on the 28th and should be delighted if you could come down from New Haven for some of them, and stay with us as our guest over night, choosing the time that is most convenient for you. I enclose the program of activities. There will be plenty of time for real thinking, in a quiet unhurried way. We should all much appreciate your thinking with us, and hope you can stay throughout.

Cordially yours,

ALICE V. MORRIS

(Mrs. Dave H. Morris)

② 朝河-1 1924 (大正 13) 年 10 月 30 日 [タイプ控・イエール大学図書館所蔵]

わが親愛なるモリス夫人

来る 11 月 25 日の会議の折にお宅にご招待くださるとのこと、恐縮に存じます。あいにく火曜日は 1 週間のうち最悪の日で、水曜日午前の講義の下調べのため真夜中まで休む間もなく仕事をせねばなりません。しかしその講義を週の別の日にふりかえる可能性は残されていますから、来週、確定次第ご連絡することにいたします。

ところで、あなたとご主人様には、そのご親切の数々と、小生に対する敬意に対しましてたいへん感謝いたしております。ご依頼のスピーチに関しては、実際的な知恵の面で、私がいかに決定的に欠如している人間であるかが、あなたにはまだ十分にお判りになっておられないと申上げるほかはありません。カトレル博士の明敏さを垣間見るにつけ、ただ賛嘆するばかり、こ

これは、まさしく私の持ち合わせていないものであります。この貴重な「手腕・掛引き」は私には無縁なものなのだ、日々思い知らされておる次第です。どうしてこの私に、会合をおちこわしにしないでスピーチが出来ましようか。私を押し止めるものは躊躇でも恐怖からでもなく、その会合の性格についての手応えの不確かさに加えて、人間のスピーチという、この長たらしい始末の悪い代物に対する、不器用さと生来のじれったさなのです。どんな人たちが集まるのだろうか、何人位いるのか、私たちの運動に対して、大方が味方なのか、敵なのか、はたまた中立的なのか、どのような方針で話すことをお望みなのだろうか。このように長々と申し上げたからといって、私が勿体ぶっているなどとは、ゆめお考えにならないでいただきたい。ただ私が口を開いたとたん、近所の番犬が一せいに吠えたてるのではないかと恐れているだけなのです。

もしお手数でなかったら、その会合について、もう少し情報をお知らせいただけないでしょうか。そしてその上でもし、私がやらない方が会合自体にとってやはりいいのだ、とこの私が結論したなら、スピーチを取り下げる特権を留保する、という権利を私に与えて下さいませんか。

私が今執筆中の本の予告が載っているチラシをお送りします——私がいかに「非实际的」な事柄に関わっている人間であるかをお示しするために。

敬具

30th October,

1924.

My dear Mrs. Morris:

It is most kind of you to invite me to your home on the occasion of the meeting of November 25th. Tuesday is for me the worst day in the week, as I have to work every minute up to midnight, in order to prepare for my class, which meets Wednesday morning. There is a possibility, however, of making some arrangement to meet the class on another day of that week. I shall know definitely next week, and will write you as soon as I find out.

In the meantime, I wish to tell you that I am grateful to you and Mr. Morris for all the kindness and honor you do me. As regards the little speech you ask of me, I can only

say that I think that you have not discovered quite clearly how positively lacking in all practical wisdom I am. The more I see of Dr. Cottrell, the more I admire his sagacity. And that is precisely what I do not possess. I see every day that the precious savoir faire is not in me. How can I speak without spoiling the meeting? It is not hesitation and fear that deter me, but my clumsiness and my natural impatience with this slow and awkward thing called the human speech, added to my feeling of uncertainty as to what the occasion may demand. What sort of people will there be, and how many? Will they be mostly friends or foes or neutrals about our movement? And along what lines would you have me take? Pray do not think, from this lengthy wording, that I take myself too seriously. I am only afraid that when I opened my mouth, all the dogs in the neighborhood bark.

Please let me know a little more, if it is not too much trouble, about the meeting, and grant me the right to reserve the privilege of declining to speak, if I should conclude that it would be best for the meeting if I did not try.

I am sending you a circular containing a notice of the book I am preparing, with a view to showing you how I spend myself in "impractical" things.

With best wishes, I am

Yours very sincerely,

- ③ モリス夫人-2 1925 (大正 14) 年 4 月 1 日 (ニューヨーク東 70 番街 19, 国際補助言語協会) [タイプ原本・イエール大学図書館所蔵]

我が親愛なる朝河教授

3 月 29 日付および 30 日付のお手紙を拝読いたしました。来る 5 月 4 日の週末においで頂けること、たいへん嬉しくご配慮を深謝します。

私は今、感情の相剋のただ中におります。私の中の一部は申します。「しつこくしてはならぬ、ご迷惑になるばかりだ」と。ところが、他方の私はいい続けます。「朝河教授が 5 月 5 日に講演して下さったら何とすばらしいことだろう。再考して下さるよう説得はできないものか」と。このようないわば、私の一方的な気分のままで、お手紙を差し上げてよいものかどうか分かりません。でも先生は、いつもきっと分かてくださる、という楽観的な気分を起こさせるお方ですので、私はついに「もし最初に成功しなかった

ら、またやれ、またやれ、またやるのだ」という古諺を信じたがる気持ちに打ち勝てず、後者の声に身を委ねるにいたった次第です。私どもは心の底から来ていただきたいのです。この5月5日の日取りは決定ではありません。ご都合に合わせて再調整は可能です。ニューヘイヴンから再度来ていただくより、一回の旅程でIAL(国際補助言語)の全活動をご理解いただくほうがお楽であろうと考えたため、その日取りをただで、ほかの日の方がよろしければ、そのように手配いたします。ただ一つの条件は、この会合は金、土を除いた週日の午後に行いたい、ということでございます。

私が自分の衝動に屈服してしまったことを、きとお許しいただけると信じます。同時に次の二つのこと、是が非でも先生を——ほかのどなたでもなく——必要とするということと、それでも、なおかつ、ご辞退なさりたいのでしたら、涙をのんででも了承するという、この二つのことを、おわかりいただきたいと存じます。

敬具

アリス・V・モリス

デイヴ・H・モリス氏夫人

International Auxiliary Language Association
in the United States. Inc.
19 East 70th Street
New York
April 1, 1925

Prof. K. Asakawa
Department of History
Yale University
New Haven, Connecticut

My dear Prof. Asakawa,

Your letters of March 29th and 30th have been received, and I am so glad you think you can be with us over the weekend of May fourth. It is very good of you to try to arrange for this visit.

I am torn between conflicting emotions. One part of me says: "do not be insistent;

it is a nuisance". Another part of me keeps repeating: "it would be so wonderful if Professor Asakawa would speak on May fifth, —can he not be prevailed upon to reconsider?" I do not know whether I ought to write to you in this spontaneous vein, but you are responsible for giving me the happy feeling that you will always understand, so I am yielding to the part of me that dies hard in its buoyant belief in the old adage "If at first you don't succeed, try, try, try again". We do really want you with our whole hearts and minds. The date of May 5th has not been definitely fixed. We are all still holding it open, but can make any readjustment that would suit you better. We had only thought of that date because we thought it would be easier for you to take in all IAL activities on one trip than to make a second trip from New Haven. If, however, another date would be more convenient for you I am sure we can manage it. The only conditions that we should like to fulfill are that the meeting be in the afternoon, any week day, except Friday or Saturday.

I trust you will forgive my yielding to my impulse and that you will realize two things, first, that we want you most terribly and nobody else, and second, that if you still feel that you must decline we shall thoroughly understand even though with tears.

With sincerest greetings,

Cordially yours,

ALICE V. MORRIS

Mrs. Dave H. Morris

④ 朝河-2 1927 (昭和 2) 年 12 月 21 日 [自筆控・イエール大学図書館所蔵]

親愛なるモリス夫人

あなたのお仕事に参画し、いろいろ見聞きし考えてみまして、私は次第に次のような確信に到達しました。それは、すべての国家の国語に対して公平であり、すべての国民にとって受容しうる人工語の合成を最初から目指すことは、實際上不可能であること、したがって、さしあたり、西洋文化圏に属する諸国民に役立つような合成言語のみに仕事を局限した方が、はるかに賢明だろうということです。このような見解の根拠はおよそ以下のようです。

IAL (国際補助言語) の主たる目的は、国家間の相互意志疎通を促進することです。しかし実は、この第一の目的に直接寄与するいわば第二の目的が

あるのです。すなわち IAL と現存国語との間の相互往復関係です。A 国語から IAL へ、次いで IAL から、それが役立つことを目指す諸国語群の中の B 国語へと移行することは、同等に容易であるべきです。言いかえると、IAL は単に相互通信用だけでなく、教育的・文化的価値を具有すべきです。後者の文化的・教育的価値がなければ、IAL は統合的でなく恣意的なものとなります。補助的でなく押しつけとなることでしょう。かくて相互通信という目的そのものが、大方失敗することになります。というわけは、その種の言語はその機械的構造においていかに簡単で完全なものであっても、その対象とする国民の文化に多かれ少なかれ異質的なものであり、その外面的な単純さはその実、単なる記憶を強いる結果となるからです。逆にもし、IAL が、その目指す諸国民の共有の歴史的文化的の諸要素を体現していたとすれば、だれもがその中に親和的・同質的なものを発見し、その学習は楽しみとなり励みともなりましょう。ひいてはこの基盤をもとに、その言語圏内の他の言語を研究することにも繋がるのです。そうすれば、このような合成言語は、相互意志疎通のための機械的な道具たる次元をはるかに越えて、文明に対して真に精神的な意味で決定的な貢献をなすでありましょう。

以上の二重の目的——相互通信と文化的意義——は、私たちの努力が、全国家つまり西洋と東洋を対象として、IAL を合成しようとする限り、決して達成されえないことは明白です。現在の人類の知的レベルでは、世界に現存する、この多種多様な人びとと諸文明の共通公分母に直ちに到達することは、明らかに不可能事です。世界の主要な諸国民だけでも満足させるような言語文化の共通な基盤を発見することは、至難のわざです。世界中の人びとが使用できる IAL といえ、結局次の二者のいずれかにならざるをえません。すなわち、いかなる国民の文化的遺産をも表現せざる冷きメカニズムか、さもなくば、人工的なルールをもつ一方ではおそろしく偏頗な語彙をもった不調和な混合物か、そのいずれかです。後者の類いは、先ずその文法的側面では、その語彙を借用した言語を使用する国民にとっては、不快な異常生成物であり、他方その語彙の側面では、その他の諸国民にとっては堪え難

い押しつけとなりましょう。その結果は、どちらの側でも（どんな IAL でも少数の信奉者はつきものですが、その人たちを除いて）、そのような IAL を公的であれ私的であれ、大方の人が受容することはありますまい。必ずや、それは変更されるでしょうし、別な企画がもち出されるにちがひありません。

この際、ハッキリと私たちの仕事を限定し、全精力をあげて西洋の一大地域言語たるべきものに集中するのが、はるかに賢明なのではないのでしょうか。このような決断は、私たちの仕事に決定的な影響を及ぼし、その性格をあらゆる側面で規定することでしょう。私たちは不可能な仕事から解放され、実効性をもつ射程内で、仕事を進めることが可能になりましょう。私たちは、西洋の歴史に自然で、西洋の精神に即したものの探究に精力を傾けるべきであり、一見簡単だがその実、A にとっては不自然であり、B にとっては異質であり、結局万人にとってなじめず、受け入れがたいものとなるようなものは、この際とるべきではありません。私たちが基本的見解の上で、このように明確な目的を設定すれば、私たちの仕事は、依然としてその範囲は広大であっても、その進行の全過程において、またそのすべての派生問題において、明確な目標に向けて制御し方向づけが出来ましょう。加えて、他の学者や、関心を抱く一般人の協力も、比較的容易に求め、かつ得ることもできましょう。

このような努力の結果は、率直かつ簡潔に西洋国際補助言語と呼称すべきです。いかなる状況においても、世界語と宣せられてはなりませんし、東洋人たちは自分たち同士のコミュニケーション用として、その採用を要請されてはなりません。彼らはその自由意志に基づいて、西洋諸国民とのコミュニケーションに当って、当然それを使用することになりましょうが、それを自分たちの道具として受け入れようと、あるいは望むなら自分たち自らの手で同等に重要な地域言語を考案しようと、自由に任すべきです。将来、^そ上へのせられテストを経た、複数の大地域言語の基盤の上にも、真に実際的な世界言語が、いつの日か構築されうることでしょう。

適切な西洋 IAL、それはいかなる学者集団であれ、その最善の努力を傾

注するに価する、人類への貢献の一形態でありましょう。しかしおそらく、私たちの協会が、世界言語への地ならしをしようという当初の目的を放棄する必要はないでしょう。私の切なる願いはただ、わが協会の最初の大事業を明確に構想せんがためのものであります。 敬具

21 December, 1927

Mrs. Dave H. Morris
Honorary Secretary

Dear Mrs. Morris:—

My association with your work and my observation and thought have gradually brought me to the following conviction:—That it would be practically impossible to aim from the beginning at a synthetic language which would be fair to all national languages and acceptable to all nations; and that it would be much wiser, for the present, to devote our work exclusively to the consideration of a synthetic language which would serve the peoples of Occidental culture only. My reasons for this viewpoint are briefly as follows.

The chief purpose of an I.A.L. is to facilitate intercommunication among nations. But there is a second aim which is directly contributory to the first, namely, accessibility to and fro between the I.A.L. and the existing national languages: it should be equally easy to pass from one national language to the I.A.L. and to pass from the latter to another national language in use in the group which the I.A.L. serves. In other words, an I.A.L. should possess not only intercommunicational, but also educational and cultural value. Without the latter value, an I.A.L. would not be synthetic, but arbitrary; not auxiliary, but an imposition. And the very purpose of intercommunication would be largely defeated, for such language, however simple and perfect in its mechanical structure, would be more or less alien to the culture of the nations for which it was designed, and its apparent simplicity would really be a demand for sheer memorizing. If, on the contrary, an I.A.L. embodied elements of the common historic culture of the group of nations which it served, everyone would discover in it something familiar and congenial to him, and would find it a pleasure and stimulus to learn it, and also, from this foundation, to study other languages of the group. Such a synthetic language would then be vastly more than a mechanical tool of intercommunication, but also a vital contribution to civilization in a really spiritual sense.

The double purpose—intercommunicational and cultural—could, it is clear, never be attained if we strove to make an I.A.L. designed for all nations, Occidental and Oriental. In

the present state of our knowledge, it would manifestly be an impossibility to arrive at once at a common denominator of the great diversity of peoples and civilizations that exist in the world;—to find a common ground of linguistic culture which would satisfy even the more important of the nations of the world. Any I.A.L. which could be devised for the world's use would be either one of the two things: a cold mechanism expressing the heritage of no nation; or an incongruous mixture of artificial rules on the one hand, and, on the other, a preponderantly one-sided vocabulary. A language of the latter sort would, in its grammatical aspects, seem an offensive excrescence to the nations whose vocabulary it has borrowed, and, in its vocabulary, an intolerable imposition to the other nations. The result would be that neither party (except a few adherents which any I.A.L. would acquire) would accept such an I.A.L. officially or otherwise in any large number. To all certainty, it would be changed, and other schemes would spring up.

Would it not be far wiser to make up our minds at once to limit definitely the scope of our work and to concentrate our effort solely upon the consideration of what should be a great regional language of the Occident? Such decision would influence our work in a decisive manner and determine its character in all its aspects. We should be liberated from an impossible task and be enabled to work within the range of practicability. We should bend our energies to the consideration of what would be natural to the history and true to the genius of the Occident, and not something which would be simple in appearance but in reality unnatural to some, alien to others, and uncongenial and unacceptable to all. With so clear a purpose in our constant view, our task, though still vast in range, could, in all its progress and in all its branches, be controlled and directed to definite ends. Moreover, the co-operation of other scholars and of the interested public could be sought and obtained with comparative ease.

The result of this labor should be frankly and simply called an Occidental I.A.L. It should not, under any circumstances, be proclaimed as a world language, and the Oriental peoples should not be asked to adopt it for intercommunication among themselves. They would naturally use it, of their free will, in their communication with Occidental nations, but should be left free either to accept it for their own uses or to frame, if they would, an equally important regional language of their own. Only upon the basis of great regional languages, which shall have been tried and tested, a truly practicable world language could some day be built.

An adequate Occidental I.A.L. would be a contribution to humanity worthy of the best effort of any body of scholars. But it would not be necessary, perhaps, for our Association to renounce its original object to prepare the ground for a world language. My plea is only for a clear formulation of the first great task of the Association.

Very faithfully yours,

K. _____

KA:EM

⑤ 朝河-3 1929 (昭和 4) 年 4 月 23 日 [タイプ控・イエール大学図書館所蔵]

親愛なるモリス夫人

私が失礼をも顧みずお送りした拙著を受けとった旨の、たいへん手厚いお手紙を拝見しました。

サピア氏がその着手した研究を続けられないとのこと、残念には思いますが私としては別段おどろいていません。このような事態はどうやら、その種の研究の事実上の中止を意味するように思われます。つまり本件については、単に意気消沈するだけではなるまいと思うのです。率直に申して、この研究は、ある点では貴重な仕事ではありますが、IALA [アメリカ合衆国国際補助言語協会] の諸目的からは程遠いものでしたし、その継続は高くつくものとなったことでしょう。この際、私たちが次の打つ手を即刻きめること、さらに今回の研究に着手した時より、さらに明確な視点を導入してそれを決定することが、これですます緊急の課題となったということではないでしょうか。

同封の勧告は、研究の第 1 サークルと私が名づけたものが続行されないと決まっただけ、少々の修正を要することになります。しかし、観点をそう変化したとしても、私の文章の残りの部分は現状のままで差し支えないと思われます。

私共の協会においてすら、「時間」というものが私たちの諸問題を徐々に明確にし、私たちの考えをはっきりさせてゆく、その仕方には、容赦せぬ冷酷なものを感じます。遅かれ早かれ、私が協会に関与することを続行すべきかどうか、決定を迫られるように思われます。ここに同封いたします勧告書は、当協会の諸方針と諸問題が、時の経過と共に展開し、辿りついた一つの

一里塚となるかもしれません。そしてこの勧告書が、IALA に関わる私の立場にとって決定的なものとなるかどうかは、今後の推移にまつほかはありません。

お気づきのように、私の勧告のいくつかは明確なものです。それは、最近のいくたの出来事が、将来への展望についてハッキリした見通しを私に与えてくれたからでありまして、これまではそれが困難だったものです。

私の見解はそれだけでも自明なことと思いますが、その中の一つについて、特に強調したいと思います。それは、その問題が他の諸点に比して重要だからという理由ではなく、個人的な私信の形のほうが、よりよく敷衍できるように思われるからです。

その問題は、私たちが、コリンソン、サビア両氏がまとめられたものに入力するべきか否かという点に関するものです。彼らがこのことを承諾するかどうかは重要ではありません。事はきわめて簡単で、編集はすべきでないと考えます。この態度についての理由は、同封の文書に十分に書いてありますが、私はこの際、別なところで観察した、他人が手を加えたため^{きんたん}惨憺たる結果に終わった、いくつかの例を申し述べたく存じます。

ある私の友人が、何人かの執筆者の手になる書類と調査書を監督する仕事を課されました。その人たちの書いたものは、それぞれ異なった性格をもっており、あるものは単に事務的なものであり、またあるものは執筆者の個人的な精神的営為に属し、さらにあるものは、それぞれの分野で、多かれ少なかれ著名な専門家の手になる調査事項である、といった具合でした。最初の場合は、機械的で非個人的なものであったため、自由に、なんら不快感を惹き起さずに修正されました。ところが、この良心的な私の友人は、他の二種類の仕事についても同じように綿密に、同じ手続きを進めたのです。そしてその結果には、びっくり仰天してしまいました。第二種の仕事の場合、筆者たちは再三再四、頭にきた挙げ句の果て、ついには全くやる気をなくしてしまいました。それというのも私の友人は、その仕事は、当事者にとってどれほどの個人的な精力の消費に連なるものであるか、透徹した見通しを持たず

に作業を進めさせ、やがて出来上がったところでその成果を徹底的に点検し、その大方を書き直させたからです。書き直しは、いかなる条件下であっても辛い作業です。しかもこの場合、^{はため}傍目から公平に見て、大方は不必要な書き直しでした。私の友人は、終始善意をもって事に処し、作業を進める人びとに対して自分が与えつつある苦悩については、つゆ知らず、その原稿修正の手をゆるめようともしませんでした。一同の忍耐も次第に限界に達し、いくにかは健康そのものを害してしまいました。そして一人また一人と、彼らは彼の下を去って行きました。同じではありませんが同様な結果が、調査系の学者たちにも起りました。もともと協力的な彼らは、はじめのうちは彼の修正も恕しました。しかしながら、なにがしかのプライドを持ち、自他共に任じている専門家として責任をもつその成果が、修正と変更をうけ、見るべき改善の跡はおろか、正確さと論点は消失し、常に多かれ少なかれ、その個性が抹消される結果をくり返し目にしたとき、彼らは本意ながら、彼と^{たもと}袂を分つこともやむをえないと感ずるに至ったのです。このようにして、忠誠心と明るい見通しをもってスタートし、もし、私の友人が個々の協力者に同情心を失わず、その個性的な表現を激励することに努力を傾けていたなら、熱意に支えられて満足しうる終結へと進展したであろうところのこの仕事は、初期の段階で挫折してしまっただけです。彼がこの事態に目覚めたときは、時すでに遅しでした。本件は、全員が良心的で名誉を重んずる人たちの間に起っただけに、きわめて不幸な出来事でした。もし、私の友人がもう少し早く反省し、その努力の方向転換をしていたら、全く違った路線を辿っていたことでしょう。

私どもの委員会も、私の友人の轍をかりそめにも踏むことのないようにと、この例を長々と申し述べた次第です。私が原稿に手を入れることの害について強調するのは、このようないきさつを直接に見てきたからであることをお分かりいただけたと思います。

原稿修正の件は、私が同封の勧告書の中に記したいいくつかの論点の一つにすぎませんし、実をいえばあまり肝要な点ではありません。他の論点には、

さらに慎重にご検討いただくよう切にお願いいたします。

私の見解の若干は、あなたのそれと一致しないこともありましようし、私の委員会における地位を、これらの見解のいくつかに賭けたい所存ですので、この際シェントン、カトレル、モーガンその他の諸氏にも、私の考えを記録に残すために本勧告書を提出したいと考えます。そのように取り計らうべきだと思いかどうか、ご返事を頂きたいと存じます。

私の勧告の論点のいずれかの点について、くわしいご説明が必要であれば、手紙なり、直接お目にかかってなり、いつでもご指示通りにいたすことは申すまでもございません。

敬具

[同封物]

言語研究について

われわれの言語研究は、現在ますますの進捗中にあるので、この機会に当面の研究に関する、小生の意見と勧告を明確に表明したいと思う。

以下に提示する見解は、次の観点に基づくものである。

1、最近なされた研究は、一定の確固たる方向性を有しており、そのまま研究を継続するなら最善の結果を招来するであろうこと。

2、その状況から、今後は同心円的研究態勢をとることが最善と思われること。つまり現在進行中の研究が最外円を形成し、今後なされる研究は、より狭い同心円を構成し、そのようにして次第に、IALA の中心的目標に向かって収斂する、というようにする。

3、すべての同心円は、一つの最終的目標に奉仕する一方、各円はそれぞれ明確な目的をもち、それぞれ独自の価値をもつような結果の招来を志向すべきこと——すなわち、それらの価値は、将来の研究調査者たちが、わが協会内にあると外にあるとを問わず、それを有用と見なすような独自性をもつものであるべきこと。

4、より具体的には、現在進行中の研究が指し示す方向によって、本研究の性格は、少なくとも二つの円、すなわち現在の外円と次の、より狭い円とに、はっきりと識別しうること。第二の円は第一円の完成後に着手してもよ

く、あるいは、それと平行して同時に研究を進めてもよいこと。

第1円と第2円(サークル)

第1円は、すでにコリンソン、サビア両教授の研究がその傾向をみせているように、言語的領域における人間活動の一般的研究であるべきである。それに対して第2円は、ある特定の国語および国際語の個別的研究でなければならない。第1の研究の対象は「言語」そのものであり、第2のそれは「具体的諸言語」である。前者は、より一般的で哲学的であるのに対し、後者は、より言語的・实际的で、わが協会の中心目的に、明らかに、より近い位置を占めるものである。

さらに、より具体的には、第1の研究から派生した原理・問題・示唆は、第2の研究の段階で最善の合成物の発見に資するべく、限定的に選択された諸言語の詳細な検討と批判によって例証され、補足されることになる。

前述の二つの円の研究においては、人類言語が研究の唯一の基礎資料であり、例示のデータがそこから選択される唯一の材料であることはいうまでもない。しかし、これら二つの主たる目的のために言語を取り扱う場合の、その過程は、両者において大いに異なる。第1サークルは、その調査に際し、人類言語のうちいかなる言語も、またすべての言語をも取り上げうるし、例示の目的のためにそのすべて、あるいはいかなる言語をも援用してよい。一方、第2サークルは逆に、まず(A)ある一定数の西洋言語と、(B)その実行可能性を証明した合成言語のすべてを決定することに始まり、その研究の各段階においては、かく選択された各言語のすべてを一つ一つ慎重にすぎるほどの公平さをもって取り扱い、材料の行き当りばったりの選択を厳に避けて調査研究し、その例示をすることとする。

以上述べたことから、二つのサークルの適切な目的と方法が、常に明確に視野に設定されていなければならないほど、それぞれの研究の成果は、より明快で、より貴重なものとなること、一方逆に、第1サークルであれ、第2サークルであれ、目的ないし方法の混乱は、不可避免的に不満足な結果に至るだろうことは明白ではないだろうか。次に、二、三の混乱したケースについて想像し

てみよう。

まず、目的の混乱について。第1サークルの研究が、第2サークルの目的をも追求した場合を想定すると、それによって研究者の注意とエネルギーは、二つの大きく異なった領域に分割されてしまい、研究が非常に長びくことになってしまうであろう。彼の重荷と責任は莫大なものとなり、長い労働の後のその成果は、いずれの領域においても、妥当なものではあり得ないであろう。そもそもそのような歴大な事業において、満足すべき分析と合成を共に望みえようか。合成的側面の作業に限っても、世界中の雑多な、全く類似性をもたぬ言語群から実際的な結論など引き出しうるだろうか。数ある言語の中には、分析的目的のため、無作為に使用して差し支えない場合もあるかもしれぬ。しかし大部分の言語について、われわれは合成という目的を達成すべくあまりにも貧弱な知識しか持ち合わせていない。一度に二兎を追うことを、研究者に求めてはならぬ。合成という実際的な問題には煩わされしないで、言語一般の哲学に沈潜することを許されたとき、その仕事は大きな価値をもつことを確信する。直接的な実行可能性のごとき問題につき合って、自分の仕事の質を妥協せしめないこと、これで十分であり、それが望ましくもある。第2サークルにおける目的の混乱の害悪については、そのイメージを思い浮べるためには、第2サークルの研究の場合使用する言語は、その数と種類が嚴重に限定される、ということ想起すれば十分である。明らかにそれらの言語資料は、人類言語一般の哲学ないし心理学の考察のためには全く不十分な材料である。

ついで、方法の混乱の問題を考えてみよう。もし第1サークルにおいて、一貫してその実例を、一つの国際語と二、三の国語だけから選んだとすれば、第2サークルで徹底して行うべき仕事をきわめて部分的に、非常に片手落ちにすることになろう。その上、われわれの手にはちょっと荷が重すぎるのではないかと、さらに悪いことには、われわれの自負しているところの、大いなる知的・道徳的責任を自覚していないのではないか、という印象を与えることになろう。同様に、もし第2サークルの研究において、たった

一つの国際語しか使用しないか、複数の国際語を使ってもそれらの間に、公平に注意を配分しないで仕事を進めた場合、やはり同じような非難がわれわれに向かって浴びせられるだろうし、ひいては、無視された国際語の唱道者のみならず、中立的な人たち——この人たちこそ実は、われわれの全奉仕の真の対象を構成するのだが——の善意もが、われわれから引き離されることは必至であり、致命的な結果となるだろう。また、ふたたび第2サークルにおいて、その基礎資料としてであれ実例としてであれ、もし世界中のあらゆる種類の言語を行き当たりばったりに検討したとしたら、その結果は、外部の世界にとっても、われわれ自身の目的にもなんらの価値ももたないだろう。何故なら、それは非科学的アマチュアリズム〔素人芸^{しろうと}〕であり、堅実な建設的作業のための材料としては完全に不向きなものだからである。

さて、二つのサークルにおける境界設定についての、以上の提言に、各サークルに関するコメントを少しく加えてみたい。

第1サークル

本サークルの目的が「言語の基礎」であり、その他の何物でもありえない、ということに決定すれば、研究者たちがこれまでとった方向は大へん好運なものだった、と思われる。それは、才能に恵まれた二人の学者の手による、相互に調和的だが、はっきりそれと分かる、個性化された一連の研究である。たしかに本研究は、大きな全体の部分たるべく意図されるものだが、二人の学者がたがいに分け合った部分に、各人の独立した、独自の習練と視点を傾注したのは喜ばしいことであった。彼らの研究が、かくもすぐれたものになったのは、まさしくその個性が自己表現することができた、その自由さに起因するものだと考えざるをえない。彼らが手がけた、また今後手がけるだろう幾多の研究の相違こそが、当協会の自慢の種をいや増すことになるはずである。あえていうなら、当協会が出版する彼らの研究成果が、個性的であり、個人的なものであればあるほど、その価値は大となり、中立的な学者の興味と共感に訴える力をいや増すことになろう。彼らの論文を、編集による統一などを一切せずに、そっくりそのまま出版することは、当該学者に

対するわれわれの敬意と、その業績に対するわれわれの評価を表明する方法であろう。然り、論文は自ら語るべきであり、事実、語っている。本協会はその研究成果の質を是認し、一方学者たちは、筆署名明記の上で原文のまま発表されるその見解に対して、個人として責任をもつのである。

第2サークル

すでに述べたごとく第2サークルは、IALAの実践的な目的のため、可能な限り多数の西洋語と、同じく最大限多数の国際語との詳細な比較研究であらねばならない。その性格は、サビア、コリンソン両氏の仕事が現在の形態でスタートする以前に開始されていた言語研究によって、すでに部分的ながら示されている。本サークルに関連して、すでに触れたことに加えて、次の二点を指摘したいと思う。

第一にわれわれは、われわれの教育的研究と言語研究とは、その目的のみならず方法においても、たがいに明確に区別されることを瞬時も忘れてはならない。教育的研究の面では、IALAとしては、教授と実験の便宜をもちうるような国際語のみを利用せざるを得ないように感じられる。そのような国際語がエスペラントだったわけだが、しかし今や、その他のいくつかの国際語も、同様な目的のためには、その程度の大小のちがいがいこそあれ利用できる情勢にある。事実、その中の一つが、いくつかの公開の集会と初歩教授を開始することを提案しており、われわれと協力したいとの意向さえ表明している。別な一ないし複数の国際語も、IALAの公正さを十分確信したとき、同様な意向を表明するやもしれぬ機運にある。これら国際語の教育施設の拡充を奨励し参画する機会は、万難を排して利用すること、これがわが協会の義務であり特権であることは言をまたぬところである。要するにわれわれの教育的研究は、われわれが必ずしも制御しえない環境によって制約をうけるが、機会の増大に応じてそれは拡大されねばならず、われわれは油断なく見張っていて、それらの機会を発見すべく熱意をもたねばならない。この方向でのすべての努力は、われわれ自身の営みに直接的で実質的な価値をもつだろうことは明らかである。

他方、教育的研究と区別された意味での言語研究に関しては、問題は全くその事情を異にする。なぜなら、その教育的便宜がなお未発達の国際語を集中的に研究することを妨害するものは何もないからだ。いや、これではまだ事態の適切な表現にはなっていない、というのは、国際語の徹底的な比較研究こそが、われわれにとっては可能性の問題どころか、当然にして自明の、回避できぬ義務の問題だからである。そのような公正にして句括的な研究を、その言語研究の最大目標の一つとすることは、IALA にとって道徳的な義務であるということ、これほど明白なことはない。われわれがなすべきこと、万人が我々に期待することを、何よりも優先してなさざる理由も弁明もありえない。純粹に功利的な見地からみても、この本来的な仕事を怠ることは、そもそも IALA が組織された目的そのものを、根本的とはいわずとも、その大方において大きく損なうことになるだろうことを予想するには、さして想像力を必要としない。うまくいってその努力は哀れな半端なものとなり、その説くところも、きわめて制限された価値をもつのみで、広く一般にとって受け入れ難いものとなり果てよう。この問題では、私は IALA のプロポジションの感覚に強く訴えたいと思う。本来的な仕事は、何はさておき双手を挙げて着手すべきである。さもなくば、IALA は怠け者で失敗者であるほかはない。

最後に述べたい点は、直接この国際語の言語研究にかかわる。すなわち、これらの国際語は、その構成要素の細部にわたって検討されるだけでなしに、全体として総合体として研究せねばならない。国語であると国際語であるとを問わず、一言語の性格を、断片的にその部分のみによって判断はできぬ。その活力、その内的生命、その特質と精神を、共感的理解をもって考究せねばならない。幾多の国際語が、人間の言語的必要のさまざまな局面に対処してきた、その技法を比較検討し終えて、なおかつ、それら国際語の、現存国語との調和性の問題、国語(自然言語)の拡充に伴う、国際語自身の弾力的生長性の問題、現代世界の活性的・動的な生活と共に脈動する、当該国際語のもちうる相対的な生命力等の、大きな問題が依然として残されている

のである。

以上の私の勧告は、次のように要約されよう。

言語研究の第1サークルと第2サークルとの明確な境界設定。第1サークルの個性的、モノグラフ（特定の問題に関する学術論文）的性格。第2サークルの厳密な科学性と細心な公正さ。再び第2サークルの場合、国際語に関する限り、その構成要素の比較検討と共に、有機的全体としての当該国際語の生命力にかかわる共感的評価。

1929年4月

April 23, 1929

Mrs. D. H. Morris
19 E. 70th Street
New York City

Dear Mrs. Morris:

I have received your very handsome letter acknowledging the receipt of my book which I had taken the liberty to send to you.

I am sorry that Mr. Sapir will be unable to continue the research which he began. I am not surprised, however. It now seems to me that this development may mean the practical end of that kind of research. For this I should not feel merely depressed, for, frankly, the research, though valuable in its way, was of very remote use to the objects of I.A.L.A., and its continuation would have been expensive. Does this not make it all the more urgent that we should decide our next step, and decide it with more clarity of view than when we began this last research?

The enclosed recommendations now need some modification, inasmuch as what I have called the first circle of research will not continue. With this changed outlook, however, the rest of my paper may stand as it is.

There is something inexorable in the way that Time gradually defines our issues and clarifies our ideas, even in our Association. I am afraid that sooner or later I might be obliged to decide whether I might properly continue to serve on our Committee. The recommendations which I am enclosing herewith may form a milestone in this slow unfolding of policies and issues; whether they will be decisive for my position regarding I.A.L.A. remains to be seen.

You will observe that some of my recommendations are definite. That is because past events have made it possible for me to think definitely for the future, which it has been difficult to do heretofore.

Although I hope that my views may seem to you quite clear, I wish to dwell specially on one of them, not so much because it is more important than the others, as because it may be better amplified in a personal letter than in the other form.

The point concerns the question whether we should attempt to edit the works by Messrs. Collinson and Sapir. It is immaterial whether they permit us to do this or not. I think that the matter is quite simple,—that we should not edit them. My reasons for this attitude are sufficiently expressed in the enclosed document, but I wish to relate to you certain examples of the disastrous effects of editing which I have observed elsewhere.

A friend had the task of supervising the writings and investigations of a number of men. Their works were of different sorts, some merely clerical, others involving personal mental efforts of the writers, and still others being investigations by specialists more or less known in their own spheres. The first kind was mechanical and impersonal, and was revised and edited freely and without the least offense. My friend, who was conscientious, did the same with the other two kinds of work with equal care; and he was astounded by the results. With the second kind of work the men who had done it were repeatedly annoyed, and finally utterly discouraged, because my friend, after having set them to writing with more or less vague ideas in his mind how much expenditure of a personal energy on their part their work would involve, overhauled everything they accomplished and set them to re-writing much of their pieces. Re-writing is a bitter task under any condition but in this case, it was, in the candid opinion of the observers, very largely needless. My friend, all the while meaning well, persisted in editing the work, entirely unaware of the torture he was inflicting on the workers. Their endurance was gradually worn out; the very health of some of them was impaired; one after another they went away. A similar though not the same result followed with the investigating scholars. They had cordially worked for my friend, and at first tolerated his editing; but when they saw again and again that their contributions, in which they took certain pride and for which they were responsible as recognized specialists, were altered and changed, with no visible improvement but with a loss of accuracy and point and always with more or less alteration of their personal characteristics, they felt obliged reluctantly to sever their relations with him. In this way the work, which had begun with loyalty and with high promise, and which would have gone on with enthusiasm to a happy conclusion, if my friend had directed his efforts to cultivating sympathy for the individual workers and encouraging their personal expressions, was killed in an early stage. When he awoke to the situation, it was too late. The case was most unfortunate, as it took place among men who

were all conscientious and honorable, and would have been entirely different if my friend had reflected sooner and guided his own efforts in another way.

I have dwelt on this example, so that our Committee would not be tempted by any consideration to follow the misguided steps of my friend. From such personal observation, you would not wonder why I am so emphatic about the evils of editing.

Editing is only one of the several points I have made in the enclosed recommendations, and is really a somewhat minor point. I beg you to give to the other points even greater consideration.

Since some of my views might not be in accord with yours, and since I am inclined to stake my position on the Committee upon some of these views, I would wish to submit them at this time also to Messrs. Shenton, Cottrell, Morgan, and a few others, so as to put my ideas on record. Will you kindly say if you would be willing that I should do so?

If any of the points in my recommendations needs further discussion, either in writing or in person, I need not tell you that I shall be at your disposal.

Very sincerely yours,

[*Enclosure*]

ON LINGUISTIC RESEARCH

Introduction.

Since our linguistic research is fairly under way, I take this opportunity to formulate some of my opinions and recommendations regarding researches in the immediate future.

The views which I venture to present below are based upon the following considerations:—

1. that the researches recently conducted have tended in a certain definite direction, and would therefore yield the best fruit if they were allowed to continue in the same direction;

2. that, in view of this same condition, it seems best to proceed in the future in concentric circles of research, the studies now in progress forming the outermost circle, and the researches hereafter to be made constituting narrower circles which should gradually close in upon the central goal of the IALA.

3. that, while all the circles should subserve the one final end, each circle should have its definite ends, and look toward producing results which should possess more or less independent value of their own.—so independent that these results would be of use to future investigators whether within or without our Association; and

4. that, speaking more specifically, the trend which the present studies have indicated enables us to earmark clearly the character of research at least in two circles, namely, the

present outer circle and the next narrower circle; it being understood that the second circle may either follow the completion of the first or be attacked simultaneously in parallel with it.

The first and second circles.

The first circle should be, as Professors Collinson and Sapir's work has tended to become, a general study of man's activity in its linguistic aspects; the second circle should be a specific study of certain definite national and international languages. The object of the first study is Language; that of the second, languages. The first is the more general and philosophical; the second, the more linguistic and practical, and decidedly nearer to the central purpose of the Association.

To be more specific, the principles, problems, and suggestions developed in the first study will in the second study be demonstrated, and supplemented, by a detailed examination and criticism of definitely selected languages with a view to aiding the finding of the best synthesis.

It is needless to say that in both circles human languages will be the only source-material for study and the only material out of which data for illustrations can be chosen. But the process of using languages for these two main purposes will be very different in the two circles. The first circle may consider any or all of the languages of man in its investigations, and draw upon all or any of them for purposes of illustration; the second circle, on the contrary, will begin by determining (A) a certain fixed number of *occidental* languages, and (B) *all* of the synthetic languages which have proven their practicability; and will at every step study, and present the case of, *every one* of the languages thus chosen, according to a scrupulously even justice to all, and avoiding a random choice of material.

From what has been said, is it not obvious that the more distinctly the proper objects and methods of the two circles are held in constant view, the clearer and more valuable will be the results of each study; and that, on the contrary, the confusion of the objects or the methods, either in the first or in the second circle, will inevitably lead to unsatisfactory results? Let us imagine a few cases of confusion.

First, as to confusion of aims. Suppose the work in the first circle pursued the objects of the second circle as well, that would divide the attention and the energy of the researcher in two widely different fields which could hardly be compassed without a very protracted study; his burden and responsibility would be excessive, and his results, after long labors, would not be likely to be adequate in either field. How might he hope both to analyze and to synthesize to his own satisfaction in so colossal an undertaking? How could he, on the synthetic side of his task, manage to come to practical conclusions from miscellaneous, utterly dissimilar languages of the world? Some of them may be legitimately used at random for analytical ends, but most of them are too poorly known for purposes of synthesis. He

must not be asked thus to chase two birds at once. I am sure that his work will possess the greater value, when he is allowed to give the less heed to the practical problems of synthesis and to keep the more closely to the philosophy of Language; it is sufficient, it is desirable, that he should not compromise the quality of his work, by dallying with questions of immediate practicality. As for the evils of confused aims in the second circle, it is enough, in order to visualize them, to remember that the languages used in this research will be strictly limited in number and in kind. Clearly they form an utterly insufficient material for any consideration of the philosophy or the psychology of human Language in general.

Next, let us consider confusion of methods. If, in the first circle, illustrations were consistently chosen from only one IL and only two or three national languages, that would be doing very partially and very lamely what should be done thoroughly in the second circle; and would, moreover, give the impression that we were poorly equipped, or, still worse, failing to realize the great intellectual and moral responsibility that we have assumed. Likewise, if, in the second circle of research, we used only one IL or used more than one but with attention unevenly divided between them, similar charges would be levelled against us, and the alienation of good will from us, not only of the advocates of the neglected ILs, but also of neutral persons, who in reality constitute the very object of our whole service, would be certain and fatal. Also, again in the second circle, if we explored at random all sorts of languages in the world, either as source-material or as illustrations, the result would have no value whatever either to the outside world or for our own purpose, for it would be unscientific and amateurish, and totally unfit as material for any solid constructive work.

To this suggested delimitation of research in the two circles, I wish to add a few remarks regarding each circle.

The first circle.

If we decide that the object of this circle should be Foundations of Language and nothing else, then it seems to me that the turn which the researches have so far taken is a most fortunate one. They are a series of mutually harmonious but distinctly individualized studies by two gifted scholars. It is true that they are intended to be parts of a large whole, but it is a felicitous event that the two gentlemen have brought to bear upon the parts which they have divided between themselves their independent and distinctive trainings and points of view. I cannot help feeling that their researches have proven so distinguished precisely by reason of the freedom with which their individualities have been enabled to express themselves. The very dissimilarity of the various studies which they have made and will make should redound to the greater pride of the Association. I make bold to say that the more individual and personal their studies which we shall publish, the greater will be their value, and the more strongly they will appeal to the interest and sympathy of neutral scholars.

It would be a way to show our respect for the scholars and our appreciation of their work, to publish their papers precisely as they are, without the least attempt to give them an editorial unity; they should, as they do, speak for themselves. The Association endorses the quality of their works; and the two gentlemen are individually responsible for the views which will be published under their names and in their own words.

The second circle.

I have already suggested that the second circle should be a detailed comparative study, for the practical purposes of the IALA, of as many Occidental languages and as many ILs as possible. Its character is already indicated in part by the linguistic research which had been begun before the work of Messrs. Sapir and Collinson was started in its present form. To what has been said in regard to this circle, I now desire to add two points.

First, we cannot forget for a moment that our educational research and our linguistic research are distinct from each other, not only in object, but also in method. In the educational research, the IALA will feel obliged to utilize only such IL of which we can command facilities for teaching and experimenting. Such IL has been Esperanto; but now it is likely that some other ILs will be available for similar purposes to a greater or lesser extent. As a matter of fact, one of them proposes to begin public meetings and elementary instruction, and has even shown a disposition to co-operate with us; another or other ILs may evince the same willingness when they are fully convinced of the justice of the IALA. Quite clearly it is the duty, and the privilege, of the Association by all means to avail itself of opportunities to encourage and participate in the extension of the educational facilities of these ILs. In short, our educational research is limited by circumstances which we cannot always control, but should be extended as opportunities increase; we should be on the alert and be eager to discover them. All effort in this direction, it is clear, will be of immediate and substantial value for our own work.

The question is quite otherwise with our linguistic research, as distinguished from the educational, for nothing prevents an intensive study of the ILs whose educational facilities are still undeveloped. And this is an inadequate statement of the situation, for a thorough comparative study of ILs is for us a matter not so much of possibility, as of natural, obvious, and inescapable obligation. Nothing can be plainer than that it is morally incumbent upon the IALA to make such impartial and exhaustive study one of its prime objects of linguistic research. There is no reason and no defense for not doing what we have to do and what every one expects us to do as the first matter of course. From a purely utilitarian point of view, also, it requires little vision to foresee that any negligence in this primary task would largely if not fundamentally defeat the very purpose for which the IALA has been organized; at best its labors would be woefully incomplete, and its recommendations would be of very

restricted value and unacceptable for the world at large. In this matter, I wish strongly to appeal to the IALA's sense of proportion. Its primary task should be done primarily and with both hands, or the IALA were a truant and a failure.

The last point I wish to make bears directly on this linguistic research of ILS; namely, that they should be studied, not only in detail in their component elements, but also as wholes, as syntheses. One cannot judge the character of a language, whether national or international, fragmentarily by its parts only; its vitality, its inner life, its genius and spirit, must be studied with sympathetic appreciation. When one has examined and compared the technique with which the various ILS have met the different aspects of the linguistic needs of man, there still remains the great question as to their relative capacity to harmonize with the national languages, their relative elasticity enabling them to grow with the expansion of the latter, and their relative vitality pulsing with the vigorous, changing life of the modern world.

I summarize my recommendations: a clear demarkation of the first and the second circles of linguistic research: the individual, monographic character of the first circle: the rigorous science and the scrupulous impartiality of the second circle: and, again in the second circle, insofar as it concerns ILS, a comparative examination of their constituent parts and a sympathetic appraisal of their powers as organic wholes.

K. Asakawa

Yale University
April 1929

⑥ 朝河-4 1929 (昭和4)年9月23日 [タイプ控・イエール大学図書館所蔵]

金曜日付のお手紙と、その文面中の、あなたに対する私の傲慢な行為を寛容されるやさしいお言葉に対し、深い感謝の念を捧げます。一途にひたむきなご意見と同様、あなたの忍耐と如才のなさは、私にとり常に感嘆のまゝであります。

Tentative Plan for Second Circle [= 第2サークルの試案] という標題 (この標題はもともとミス・フェイガーが付けたもので tentative の前に A を, second の前に the を加えられても結構です) の下に、私の名前と日付を入れ、4頁、

第2節の3行目の employed in の後に, the work done so far の語句を加えたら, というご提案に異論はございません。

私が強く進言した, 第2サークル中では, なじみの術語を使用するという件は, 私の考えでは「細部」の問題ではなく, サークル自体の目的から結果する, サークルにおける基本的な重点の一つです。もちろん第2サークルの中で, 第1サークルでなされた分析の結果のいくつかを利用することは必要ですが, 私が心から望みたいことは, その着想を第1サークルに仰ぐ事項の項目名は, たとえ不体裁になったとしても, 非専門的で形態上, 通俗的なものにすべきだと存じます。もし研究者たち自身, このような手順が, お互い同士の作業進行上不便だと思われたら, その時は二つのサークルで使われる術語の用語索引となる, 小さな照合チャートを簡単に用意できましよう。ただ, そのようなチャートは, あくまでも研究者の個人用で, 公刊用としないことです。

第2サークルは, 独立した価値を有すべきなのです。関係者のみならず門外者や部外者にも有用で, 第1サークルの理論よりも, より恒久的な有用性を保持すべきものです。

あなたは, もし専門用語を第2サークルから完全に除去してしまったら, 「不必要な仕事の重複」となると危惧しておられますが, 二つのサークル間での重複の意味でしたら, それは事柄の性質上, 当然予想されることです。なぜなら, この二つのサークルは, 細部にわたって相互補足的なものでは決してなく, 相互に独立し, 全体的言語研究という一般的視点からのみ相補的だからです。そしてこの重複も, まさに必要とされる一つの部分なのです。科学的厳密さの程度はもちろん, そのアプローチも提示の方法も, 二つのサークルでは大いに様相を異にします。従って形態的に異なった重複は, むしろ歓迎されるべきものといえましよう。

もし他方, 第2サークル内での重複を意味されるのであれば, それはいずれ不可避的な事柄であり, 前後参照を慎重に行うことによって, 大部分除去できるでありましよう。

私が是非除去してほしいと念願するものは、第1サークルの特殊な、一般になじみの薄い術語（それはほとんどの人に好かれず、たいていの人の気分を害ね、ソッポを向かせるものです）のことであり、それらの手段によって精密化されたアイデアを除去せよというわけではありません。それらのアイデアの多くは、第2サークルで有用かも知れませんが、それらにつけられている奇妙で私的なレッテルは、他の人びとにとっては無用のものなのです。

私は法律や制度の精密な専門的な事柄に、たえずたずさわっているので分かるのですが、特殊な用語が学者にとって持つ魅力というものはよく私には理解できますし、またしばしば私自身その魅力の被害者となってまいりました。特殊用語はたいへん便利で精密で、またたいへん学殖的にもみえます。しかし研究を進めれば進めるほど、その多くが短い期間のあいだに、いかに短命で、はかないものか判明することを見出しつつありますし、しかもさらに重大なことは、これらの特殊用語は本質的に、概念上ドグマ的になる傾向がきわめて大で、遅かれ早かれより高次の思考にとり、障害になる確率が非常に高いということです。少なくとも私の専門分野では、私的な用語は、一時的な議論のため、あるいは個人としてのみ、やりとりされる完全に個人的な作業のため以外は、避けるに越したことはないといえます。専門家同士の間ですら、〈通用範囲や恒久性に疑念の余地がある専門的表現〉の持つ魅惑からは身をふりほどき、やはり昔からの由緒ある用語を使うこと、そして必要とあらば、恣意的な用語を使う代りに、説明を加えてその意味を限定することがよい、とされております。この方法の必要性は、特殊な調査にかかわるモノグラフの実例において、くり返しくり返し、証明されているところです。われわれの第2サークルのように、一般人をも対象とする仕事の場合、その必要ははるかに大であるといえましょう。

バー・ハーバーで私があえて申しましたように、あなたはいくぶん、過去のお仕事の歴史の呪縛の下におられると信じます。しかし私の場合、比較的に事態を外側から、そして言語研究の目的という観点から眺められます。その点で、あなたにとって私は、少々非情な外科医のように、そしてまた個人

的にもつ知的愛着感情を、無慈悲にも無視しようとする存在のように映るかもしれません。

このことは、「言葉の基盤」ということばを理解する上での私たち二人の見解の相違にも当てはまります。序論中の私担当分の草稿では、お気づきのように、私はその句を、はっきりと第1サークルのみに限定して用い、他のサークルには他の句を付してありますが、それが一番いいやり方だ、と思うのです。もし「言葉の基盤」という表現が第1サークルだけでなく第2サークルにも適用されるとしたなら、第3サークル以下のすべてのサークルにも適用しうることになるでしょう。しかしながら、過去の仕事の歴史の重圧(自然な惰性)から自由な第三者の目からすれば、「言語の基礎」という語句は本来的に、諸言語の比較とか、合成語の調合をとうていカバーしえません。あなたが「勧告」の代りに「結語」という語の使用に同意されたとき、どうやら同様な見解をお持ちだったようです。実はこれもまた、第2サークル中の参照用「数詞」の使用と同じく、細部の問題ではなく本質的、原理的な問題です。これらのすべての点を、客観的で公平な立場から考察されることを衷心より懇請いたします。

私はまだ海岸のほとりに宿泊しており、日中、町に出て来ます。大きな月と満潮は壮観でした。そして御地バー・ハーバーでの同じ场景も、さぞや感動的だろうとしばしば想像したことでした。しかしあなたも程なく、喧噪と雑踏の中に戻らねばならないのですね。私も残念ながら同じ身なのですが……

To A.V.M. 23 Sep. 1929 answering her letter of 20 Sep. 1929.

Pray accept my thanks for your letter of Friday and the kind words it contained forgiving the bumptious course of action I have pursued toward you. Your patience and tact, no less than your thoroughly sincere intention, are a source of continual wonder to me.

I have no objection to your insertion of my name and data under the title "Tentative plan for second circle", (which title had been given by Miss Faegre; and I should not be sorry if you added "A" before "tentative", and "the" before "second"), or to your adding the

words "the work done so far " after "employed in", in the 3rd line of the 2nd paragraph on page 4.

As for the use of well-known terms in the second circle which I strongly recommended, that is not a " detail" in my mind, but one of the fundamental points in the circle, resulting from the aims of the circle themselves. It is necessary, of course, to utilize in the second circle some of the results of analysis made in the first circle, but I hope sincerely that the rubric-names for the items whose ideas are adopted from the first circle will be untechnical and popular in form, even at the risk of being clumsy. If the workers themselves find this procedure inconvenient in their personal use of one another's work, then it would be easy enough to have a little reference chart made showing the concordance of the terms used in the two circles. Such a chart would be for the private use of the workers, and not for publication.

The second circle should have an independent value;—should be useful for layman and outsider as well;—and should be of more permanent utility than the theories of the first circle.

You fear "unnecessary duplication of work" if technical terms were wholly eliminated in the second circle. If you mean duplication between the two circles, that will be expected from the nature of the thing, for the two circles are by no means mutual complements in detail but independent of each other, and complementary only from the general standpoint of the whole Linguistic Research. But this duplication is exactly a part of what is needed. The approaches and the methods of presentation, as well as the degree of scientific fullness, will be very different in the two circles; and the duplication in different forms should be welcomed.

If you mean duplication within the second circle, that will be more or less inevitable, and may be largely obviated by the judicious use of cross-references.

The elimination which I plead for is that of the special unfamiliar terms of the first circle, (which few persons like, and offend and turn away most persons), and not that of the ideas elaborated by their means. Many of these ideas might be helpful in the second circle, but the strange private labels used for them are not fit for other people.

Dealing as I continually do with minute technicalities of law and institutions, I am quite appreciative of the fascination that special terms have for scholars, and have often fallen victim to it; they seem so convenient, so precise, and, too, so learned. But the more I study, the more I am discovering how ephemeral many of the terms prove in the course of a short time, and, what is more serious, how liable they are to become essentially dogmatic in conception, and sooner or later obstructive to more advanced thought. In my field, private terms should best be avoided except for a momentary purpose of argument, or for a thoroughly individual work which is passed around only as individual. Even among specialists, we have

learned to be free from the glamor of technicalities of doubtful currency or permanence, but to use time-honored terms and to qualify them, when necessary, by explanations, not by arbitrary terms. The need of this method is again and again demonstrated in actual examples of monographs of special investigations. The need is much greater when a work is intended for laymen as well, as our second circle will be.

As I ventured to say to you at Bar Harbor, you are, I believe, more or less under the spell of the history of your past work, but I am relatively able to look at the matter from outside and from the standpoint of the purpose of the Linguistic Research. Therein I might seem to you somewhat like a ruthless surgeon, and cruelly unrespectful for personal intellectual attachments.

This applies also to our difference of view in regard to our understanding of the phrase Foundations of Language. In my draft for my part of the Introduction, you will notice that I resolutely identified that term with the first circle only, and gave other terms to the other circles. That seems to be the best course. If the term F.L. were applicable to the second circle as well as to the first, I do not see why the same would not be true with the third and all the later circles; but, from a third person's viewpoint who is free from the natural inertia of the past history of work, the proper meaning of the words Foundations of Language does not cover Comparison of Languages or Preparation for Synthesis. When you agreed to use the word Conclusions in place of Recommendations, you seemed more or less to adopt the same view. This, again, is not, like the use of numerals for references in the second circle, a matter of detail, but of essential principle. I beg you earnestly to regard all these points from a detached, impartial position.

I am still sleeping at a place by the shore and coming to the city during the day. The great moon and high tides have been glorious, and I have often imagined how inspiring they must be at Bar Harbor. But you must soon be returning to noise and crowd, as I regret I have to do...

⑦ 朝河-5 1929 (昭和4) 年 10 月 13 日 [タイプ控・イエール大学図書館
所蔵]

親愛なるモリス夫人

もし「言語の基盤」(第1サークル)が第2サークルを包含するとしたら、そして前者の「概念」と SIL ルブリカ*が後者でも使用されることになれば、そしてまた「サークル」自体の内部で研究者たちが、その本来的な目標

に即応した明確な指示の下でその作業を進めるのでなかったら、そのとき「サークル」間の境界は、確実に急速にふみ越えられ、その結果として明確に限定されたサークルは姿を消し、そもそもそのような「サークル群」を設定する必要すら消滅してしまうことでしょう。

以上は、あなたの提案されたポイントを要約したのですが、これでお分かりのように、私の見解では最大の重要性をもつ問題です。私がこれらを容認することは、極度に誇張した対比をあげれば、ローマ皇帝がその前線を放棄するときのものでありましょう。その死命にかかわる災厄の洪水が、滔々^{とうとう}と帝国の全域に氾濫するか、帝国が無益な防衛努力のくり返しの中で、そのエネルギーを消耗しつくしてしまうかのいずれかでしょう。この場合の相違点は、関係する問題の規模が大きく隔絶していることですが、それはさておき、いうまでもなく帝国の運命は、それ自身の性格にほとんど内在的なものだったのに対して、われわれ自身の直面する難局は、まだ打つ手が残されており、すべてわれわれの精神的支配の範囲内にあることです。しかし前線の破綻は、直ちに災難の原因となり、侵入に対する防衛は、防御陣を消耗させてしまうという点で、両者の情勢には類似性が認められます。このような事態よりはむしろ、「サークル」間の区分がなされなかった初期の段階のほうがまだましだとすらいえましょう。なんとすれば、今やそれは無意味な存在になるであろうばかりでなく、ただ妨害の要因になるのみだからです。もしご提案を固執されるなら、4月以降の私の全提案を完全に撤回すると共に、私の貴委員会の活動への参加は終結した、とお考えいただくほかはございません。

私の立場は今や、あいまいな表現を許さぬ状況にありますから、この際、余計なことのようにも思えるのですが、あえてさらに一步を進めて、あらゆる困難の根源そのものを指摘し、あなたの猛省を促したいと思います。この拳に出ることによって、他の人が気づかないかもしれぬこと、あるいは、何人かの人が気づいてはいても口にすることは賢明でもなく、また礼儀にも叶わぬことだ、と考えているやも知れぬ事柄を申し述べたく思います。じじ

つ、私は今、通常、ある人間が相手に向かって権利がある、とされる以上のぶしつけなことを、あなたに対して敢えて行く、というわけであります。

IALA(合衆国国際補助言語協会)の全事業と、その存在自体は、あなたの個人的な支援とゆるぎなきご努力の賜であります。あなたなしには、IALAは存在しえないのです。しかし、あなたのご努力には、あなたが深くじっくりと考慮をなさるひまのなかった一側面がある、と思います。そしてその側面とは、IALA自体の運命を左右する決定的な要因であるように思います。IALAはあなたのすばらしい忠節があればこそ存在するのですが、IALAは公的に誓約を行っており、それゆえに公的な信託物であり、公的な職務への献身は、個人的財産へのそれとは、違った次元にあるべきものです。何人も、あなたといえども、非個人的で聖なる公共的委託物であるIALAの仕事の中に、個人的な趣味傾向を吹き込むことは許されないのです。個人的な忠誠は絶対に必要ですが、個人的性向は、たとえば事実の純粋な探究のような領域からは排除されるべきです。そして「第2サークル」は明らかにその領域に属します。ですからその中には、最小限の個性をも混入せしめてはなりません。忠節はここでは、目的に対する完全な忠誠と目的の純粋性を保証することに傾注されねばなりません——その忠節は忠節以上のもの、自己否定であるべきです。

単なる一例としてですが、たまたまサピア教授かイエスベルセン教授が、自分の言語理論ないし、その趣味に沿って「第2サークル」の仕事をするとか、または同様な個人的な動機から、その仕事に何物かを押しつけたと仮定してみましょう。そのときその仕事全体が、その根源において疑惑をもたれましょう——その知的レベルがいかにか高かろうとそれは純粋ではなく、その本来の目標を達成しえないでしょう。事は「第2サークル」に止まりません。客観性が必須であるあらゆる面で——そしてそれこそ、IALAの言語的・教育的研究全体の仕事の大部分を構成すべきものですが——個人的な刻印をしたいという欲望は、当の仕事の生命を奪い、公的な信頼を台なしにするでしょう。

IALA が初めて誕生したとき、その仕事は大部分、前例のないものだったためもあって、それは徐々に分化し、組織化せねばなりませんでした。幼児期から成長するにつれ、その活動は多様化し、ますます増大する多種多様な分化を前にして、何人も一人では、緊密で均質な接触をとうてい維持しえない規模に、拡大しつつあります。かくて統制の面で、組織立てと類別が必要となり、その中における人の態度も——非常に個人的なもの、さほど個人的でないもの、全く非個人的なもの等々という風に——細心な配慮のもとに、適宜分化せねばならなくなります。さもないと、微妙で厄介な問題が、いろいろな個所にそれと知らぬ間に忍び込み、やがて取り返しつかぬ損傷を引き起こすことになりましょう。IALA の多岐にわたる仕事の中の、他の側面に対すると同様な真剣な配慮を、この側面に対してあなたは払ってこられたでしょうか。

暫く前に、編集作業について生意気なことを申し上げましたが、実はそれも、今回取り上げた問題の一端にかかわるものですが、本書簡で敢えて申し述べたことに比べれば、遥かに重要性の少ないものでした——今、私は問題の核心について語っているのですから。

実は私は、あなたが最近、この次第に成長しつつある IALA の研究の領域に、IALA がまだ若くて組織も簡単で、あなたが采配をふるっていらした頃の習慣を持ち込もうとされているのを見て、危惧の念を強めてきていました。

客観性以外に、その存在理由をもたぬ仕事に対して、何人であれ、個人が私的な執着からその影響力を行使しようとするならば、そこから、不可避免的に生ずる害悪によって、将来の立派な仕事が汚染されることになるのを、私は恐怖の気持で想像していたのでした。私の分に応じて、また私の発言権を有する領域のみに限って私は、相互に区別される「サークル」を提案して、当作業の救出を図ろうと努力した次第です。それにしても、何と無礼なやり方だったことでしょう。そして今私は、さらに失礼なことを申し述べてしまったわけですが、最後に申し上げたいことは、少なくとも私としては、心か

ら役に立ちたい一心であったことです。そしてあなたの最も寛大で高貴な心情に、切に訴えるものであります。敬具

* SIL ルブリカ : Selected International Languages すなわち Esperanto, Ido, Novial, Occidental の四つの代表的な国際補助言語の要項をまとめた手引書。Rubrica はもと赤文字による指図、のち表題の意。

October 13, 1929.

Mrs. Dave H. Morris,
19 East 70th Street,
New York.

Dear Mrs. Morris:

If the Foundations of Language included the "second circle", if the "notions" and SIL rubrica of the former were used in the latter; and if workers in the "circle" did not work under clear instructions given according to its proper aim,—then the boundaries of the "circles" would be surely and quickly overstepped, and consequently there would be no definite "circles", even no need of considering such "circles" at all.

The points suggested by you and briefly repeated above are therefore, from my point of view, of the gravest import. For me to concede them would be, to take an immensely magnified parallel, like the Roman Emperor abandoning the lines: floods of fatal troubles would speedily inundate the whole of the Empire, or it would use up its energy in a continued futile effort of defense. The difference here, besides the great disparity in the scale of the issues involved, is, of course, that the fate of the Empire was nearly inherent in its own nature, while our own difficulty is remediable and wholly within our moral control; but there is a resemblance between the two situations in that a breach in the frontier would be an immediate cause of disaster, and that defense against invasion would exhaust the defender. To this state of things would be preferable even the earlier state in which the "circles" were not marked out, for now they would not only have no meaning, but also be only a hindrance. If you insist on your suggestions, I have to beg you to regard all of my proposals made since April as completely revoked, and my participation in the work of your Committee terminated.

Since my position now permits no equivocation, I wish, though gratuitously, to go a step further and point to the very fountain-source of all difficulties, and invoke your serious reflection upon it. In doing so, I shall say what others may not see, or what, if some of them

do see, they may be too wise and too courteous to say; indeed, I shall venture to assume more liberty towards you than one person is ordinarily entitled to take in regard to another.

The entire work of IALA and its very existence are due to your personal support and unremitting labor; but for you, there would be no IALA. But I believe there is an aspect of your effort which you have not had the leisure to ponder deeply; and that aspect seems to me to be most decisive in determining the destiny of IALA itself. IALA exists because of your wonderful loyalty, but IALA has made public commitments and is therefore a public trust; and devotion to a public task should be of a different order from devotion to one's own property. No one, not even you, should seek to infuse personal inclinations into that part of IALA's work which is impersonal, and is a sacred public trust in that form. Personal loyalty is absolutely needed, but personal inclinations should be excluded, for example, from the domain of pure search for facts. The "second circle" clearly belongs to that domain; and there should not be in it, the least admixture of personality. Here loyalty should be applied to insuring a perfect faith and purity of purpose,—should be more than loyalty, but self-denial.

Imagine, for a mere illustration, that by any chance Professor Sapir or Jespersen did the work of the "second circle" in accordance with his theories or his taste, or imposed anything upon the work from the same personal motive. The entire work would be compromised at its source; no matter how high its intellectual quality, it would not be pure, and could not fulfil its proper aims. Not only in the "second circle", but at every point where objectivity is requisite—and that constitutes a great part of the entire work of IALA's linguistic and educational research,—the same desire for making a personal impress upon it would vitiate the work and defeat the public trust.

As IALA was first born, its work was largely unprecedented, and had to be slowly differentiated and organized. As it grew from infancy, its activities have multiplied, and are spreading beyond the possibility of any one person maintaining a close and even touch in all their increasing variety. Control must be organized and graded, and one's attitudes in it—some very personal, others less so, still others entirely impersonal—must be differentiated with careful thought. Else subtle difficulties would creep in unawares in many places, and in time cause irreparable injuries. Have you given as much serious consideration to this as to other aspects of the manifold work of IALA?

What I presumed to say to you some time ago regarding editing touched the fringe of this question, but was of much less moment than what I have dared to say in this letter, for now I am speaking of the heart of the question.

I confess that I had been increasingly alarmed by what seemed to me to be your carrying into the growing work of research the habits which had been formed by your personal direction during the simpler state of the life of IALA. I had visioned with fear the

future good work mixed with evils inevitable from the individual effort of any person to influence even work which had no reason for existence except for its objectivity. In my small way and only in the sphere in which I had a voice, I tried to salvage work by proposing distinct "circles". And how rudely I did so! Now I am much ruder, but am at least saying a final word of truthful service, and appealing to the most generous and noble of your impulses.

Yours very faithfully,

⑧ モリス夫人-3 1929 (昭和4) 年 10 月 17 日 [タイプ原本・イエール大学図書館所蔵]

親愛なる朝河教授

10月13日付のご書簡を拝見しました。暗雲が消え去りつつあることが分かります。お互いに大いなる忍耐力が必要であり、たしかに私たちはそれをもっています。先生の大いなる忍耐力を評価申し上げると共に、意図的ではないにしても、それを度々ためすような結果となったことを申し訳なく思っています。先生はすでに私の忍耐力を評価してくださいました。そのことに感謝するとともに、それが今後とも、決して変わりなきことを保証いたします。

お申し越しの件については、折を見てゆっくりお答えいたします。この書状は単に、私の高い尊敬の気持がさらに確認されたことと、さらにいうなら、私たちの見解が、お手紙からお察し申し上げるかぎり、あなたが考えていらっしゃるよりは限りなく相似である、という確信を表明するためのものです。

敬具

アリス・V・モリス

A. V. M

[追伸、手書き] 私は全面的にあなたをご信頼いたしております。

19 East 70th Street
New York City

October 17, 1929

Dear Professor Asakawa,

Your letter of October 13 has been received. I can see the clouds disappearing. We both need great patience and surely we both have it. I appreciate yours and am sorry to put it to so many tests, —certainly unintentionally. You have already expressed appreciation of mine. For this I thank you and assure you that you may count upon its continuance.

The points of your letter I shall answer at leisure. These few lines are merely to express the continued assurance of my high esteem and may I add confidence that our viewpoints are immeasurably more similar than I must infer from your letter you think they are.

Sincerely yours,

ALICE V. MORRIS

I completely count on you.

A. V. M.

Editors' note: The post scriptum is handwritten.

⑨ モリス夫人-4 1929 (昭和4) 年 10 月 30 日 [タイプ原本・イェール大学図書館所蔵]

(前文略——訳者)

先生が、「あらゆる困難の真の根源」とお考えの点について指摘された勇氣に対し、友人として感謝いたします。そのうち、この問題についてじっくりと話し合いたいと考えています。

特に真剣にお願いしたいことは、少なくとも数年間は——せめて第2サークルの作業が軌道にのり、IALAの研究が峠を越すまでは——、その間かりそめにも、本委員会から手を引くことなどをお考えなきよう懇請いたします。いろいろな問題が前に立ちふさがっているとき、途中で手を引かれたら、たいへんな惨事となることでしょう。第2サークルの指揮にどうぞ手を貸してください。時に応じてサンプルをご送付します。来春ヨーロッパで開催予定の国際言語学会議（それが実現した場合）で問題が発生したときは、王座の陰の力（主人は「地下室の犬」と表現して悦に入っていますが）として、その人の裁可が出るまでは第2サークルの仕事にゴー・サインを出すわけに

はいかないのだと、先生をかつぎ出すことをお許しください。私どもの導きの星となっただきたいのです。ああ、必ずや起こることだろう、と予想される緊迫と嵐を切り抜ける際の介添人として、あなたにひたすらおすがりすることをお許しください。

私たちは、考え方で隔たる所はさして大きくはないと思われます。そのように見えるのは、単に雲の存在によるものです。霧が重くたれ込めているバー・ハーバーの丘陵の上では、登山者同士は相手の姿が見えません。何マイルも離れているのかも知れない。呼びかけ合う声が届くのみ、そしてそれすらも不気味に、はるか遠方に思われるのです。ところが突如、霧が引きます——すると両者間に存在するのは深淵などではなく、ひと続きの共通の大地だけなのです。

敬具

アリス・V・モリス

(デイヴ・H・モリス氏夫人)

[追伸] 思いがけず全部書く時間がとれたため、10月31日に書き終わりました。

19 East Seventieth Street

New York

Oct. 31, 1929.

[pp. 8-9]

I thank you as a friend for your courage in writing about what you consider to be "the very fountain-source of all difficulties". Some day I hope we may talk about this freely.

Most earnestly do I plead with you to give up all thought of resigning from our committee for at least several years, —until work in the second circle is under way and all of IALA's research is much further along. And *then* I hope you will never think of resigning! To have you leave *en route*, when difficulties of many kinds loom large, would be a disaster. Help direct the second circle. Let samples be submitted to you from time to time. Allow me in Europe next spring when difficulties arise in the proposed international linguistic conference (if it takes place) to hold you up as a power behind the throne (what Mr. Morris delights in calling "the big dog in the cellar"!) whose approbation must be obtained before the final word of advance is given for the work of the second circle. Be its guiding genius. Permit

us to rely on your standing by through stress and storm when they arise, as alas they are bound to.

It seems to me that we are not very far apart in our thinking, —it is only clouds that have made it appear so. On the hilltops in Bar Harbor, when the fog settles down heavily, mountain climbers cannot see each other, —they might be miles apart. Only the call of their voices reaches from each to each, and even that seems uncannily distant. All at once the fog dissipates, —and instead of chasms between them there is but a little stretch of common ground.

Always faithfully yours,

ALICE V. MORRIS

Mrs. Dave H. Morris

Finished Oct. 31, circumstances having unexpectedly allowed time for writing fully.

⑩ 朝河-6 1929 (昭和4) 年 11 月 29 日 [タイプ控・イエール大学図書館
所蔵]

親愛なるモリス夫人

10月30日付の詳細なあなたのお手紙がはっきりと示しているように、あなたと私の間の意見の相違は、非常に単純であると同時に、大へん根源的なものであるように思われます。それがいかに根源的であるかがお分かりいただけなのは、多分、事はきわめて単純なことに帰するのだ、ということをお私に十分にお伝えできなかったからでしょう。

私の書簡の主たる論点は、IALA (合衆国国際補助言語協会) の仕事の指揮系は、その公的誓約に則って再編成されるべきだ、ということにありました。このことは、結果的には言語・教育・財政その他の分野の指揮を、それぞれの分野で特別な訓練ないし適性を有する人物に委託することになります。特に私たちのやりとりの中で一番かかわりのある言語の分野は、十分に熟達し、十分に評価された言語学者で、国際語の問題については中立的な立場にあると公認されている人物が指導して始めて有効性を発揮しうるので、これらの各分野は、その長たるものが、真に活動的であるばかりでなく、自分の行動については完全に責任をもちうるよう組織化されねばなりま

せん。そしてこれら指揮者グループの上に調整機関をおき、その機能を、これら各分野の細部についての干渉ではなく、各分野の仕事の調整とその諸結果を結合することとすべきです。もし、しょっちゅう干渉を受けたら何人も、ほどなく担当分野の指揮に全力を投球することを止めてしまうでしょう。たとえ、IALA が彼の奉仕をすべて失ってしまうことがないまでも、もはや、彼の仕事に対する真の興味ないし協会に対する真実の関心は期待しえないでしょう。広く共同事業が、一見有望な躍進ぶりの表面下に、しばしば挫折の道を辿らざるをえないのも、この種の静かなモラルの低下(意気の沮喪)によるものであります。

もし、再編成が達成されたら、私たちを悩ませているもろもろの困難は影をひそめ、あるいはおのずと解決されるでしょう。逆に、合理的な指揮系の確立を見ないとき、不和とあつれき(たぶん、おおかたは表立たないが不吉な)が人びとの間に絶えることがないばかりか、IALA の旗印とする立派な目的は決して実現されず、その可能性もないだろう、という危険は歴然としています。すでに、同様な考えが当協会の内外で、多くの人たちの心はかなり意識されている兆しは濃厚である、と私は見えています。

これが主たる問題だったのです。私が勝手に提唱したサークルは、現行の指揮体制を新体制へ引き渡す一つの橋としようとの、私の個人的な提言とお考えになられて結構です。つまり、サークルに今着手して、今後の新組織へスムーズに移管せしめようというわけです。そして提案した仕事が今スタートするためには、定義し分離した研究の諸領域を、断固として混同の危険から守り抜くことが、なにもまして必要であるように思われたのです。なぜなら、過去の精神がしみ込んだ仕事は、新しい岸辺へつながる橋ではなくして、旧き土地の延長にすぎないからです。実際、外部の人たちも、またいかなる学者グループも、乱雑な、あるいは他人の個性によって、なんらかの着色を帯びた材料を手渡されても、使いたい気持にはならないでしょう。かくて、そのような性格をもつ材料を準備するために費消された努力の大部分は浪費されてしまうことになるのです。一方、逆に、各サークルをそれぞれ別

個に仕事を進めた場合には、少なくとも第2サークルでなされた仕事の結果は、世の中にとってははっきり認識できる価値をもち、IALAの今後のいかなる組織体にとっても、必要な装備（財産）の一つとなるでしょう。この際、成功への道はただ一つ、それぞれ独立した、かつ個性を排除した仕事——その中であつたのです。

ところが現実のサークルは、私が提唱した明確なサークルではなさそうで、またIALAが辿りつつあると思われた危険から、IALAを救うものでもないらしいことに気がついて愕然としました。ですから私は、サークルについての構想をすべて撤回しました。なぜなら、もし私の名前がなんらかの形で、違った方向を指向しつつある改変されたサークルに結びつけられでもしたら、もともと私は、私の考えたサークルによって、まさにその方向への動きを止めようと試みたのですから、そうした提案をしたことすら痛切に後悔することになりましょう。私は私の提案をはっきりと破棄し、あなたの委員会を辞しました。しかし、明らかに私の説明が不首尾に終わったことにかんがみて、問題のいくつかについて再度、はっきりさせるべきだと感じるのです。

今、あなたの注意をとらえている主たるサークルは、第2サークルです。第1サークルは、独立したサークルとして考えられる以前に着手されたから、十分に規定された性格をもっていませんでした。それで私は、それはそのままの状態に放置し、従来の方角へ進めて行ってもよいように思います。しかし第2サークル以降のサークルは、従前の包括的な計画とは区別され、第1サークルから独立しつつ、第1サークルと調整を計るべきことを提案するわけです。さて、ここで話を第2サークルのみに限定させましょう。というのも、10月30日付のあなたの手紙で論じられた困難点はすべて、第2サークルについての理解の欠如によるものだからです。

明確には申し上げませんが、純粋に客観的な比較を本旨とするサークルとして、第2サークルは絶対に独立的で、厳密に中立的であるべきことが、第2サークルにとって、これ以上必要不可欠なものはないのです——そ

の指揮面でもその作業面でも、またその成果の価値においても、第2サークルは独立し、他から規制を加えられるべきでなく、一方、その刊行物は無論のこと、その実際の作業面でも、第2サークルは中立的で、偏向性をもつべきではないのです。第2サークルの生命はまさに、その完全なる中立的な性格にあるのです。もしあなたが、協会の研究事業を救出し、より高いレベルへと高めたいと思えば、第2サークルは必要です。そしてその第2サークルは、その中立的・客観的性格の故にこそ、個性の排除が貫徹されていてこそ、必要とされるのです。これらの問題は疑問の余地なく明白で、この事業は、練達で公正な言語学者の下に研究管理室を設置すれば、なんら支障もなく研究は推進されましょう。そうした言語学者が第2サークルで、客観的な比較研究を指揮し監督することは、魚が水を得て泳ぐのと同様、自然で当然な行為なのです。

さて次に、私が取り上げたいことは、あなたがご書簡の中で挙げておられる留保は、いわれるような「副次的な重要性」をもつ問題とか、「語句の使用法のちがいが」の問題などの話ではなくて、それどころか、第2サークルの本質そのものに^{ていしよく}抵触し、同サークルをその根底から破壊するであろう問題なのです。

要するに、あなたは、「言語の基盤」という用語を第1サークルに限定することをお認めのようにですが、第2サークルの作業の過程での SIL の使用については、その出版物中で使用されることはないにしても、「肯定的な態度」を堅持するといわれます。そしていわゆる「概念」問題については戸惑っていらっしやる。ですから私は以下に、できるだけ簡潔に「言語の基盤」「SIL」「概念」の三点について論じてみたいと思います。

「言語の基盤」

あなたはシカゴでスタートした仕事を、当初この名で呼称なさいました。そしてこの同じ呼称を将来のすべての研究に対しても使用することを、はっきりと意図しておられました。ここで問題を二つに分けましょう。すんだ仕

事と、これからする仕事——この二つは全くちがうものなのです。私は最初の、これまでの仕事は容認しました。そして、その性格はその呼称にふさわしいものだったので、その呼称は第1サークルに限り、その継続は認められるが、他の呼称をもつ他のサークルとは一線を画すべきである、と提案したわけです。ところで、ふつう「言語の基盤」という場合の意味は、このように区画された第1サークルの仕事の内容を表現しているようですが、他のサークルの仕事には適当ではないようです。言語の比較にせよ、言語の合成にせよ、いずれの仕事も「言語の基盤」(foundations of language)と呼ぶことは当を失することになりましょう(この場合の「言語」とは単数形かつ形容詞なしの「言語」なのです)。そして私には、単なる命名の問題に止まらぬものが、ここに伏在していると思えるのです。すなわち、そのことばの意味にそぐわないサークルに「言語の基盤」という呼称を与えることは、同時にある種の思考の混乱を示すものでもあり、第1サークルの指向性の、第2サークルのそれへのある種の干渉につながる問題であるように考えられるのです。ことは、第2サークルにとって、その生死にかかわる事柄かと存じます。あなたは、「言語の基盤」なる用語の使用は第1サークルに限定することをお認め下さるようですから、これ以上の論議は不必要でありましょう。

「SIL」*

SIL は、刊行に当っては使用すべきでないにしても、第2サークルの実際の作業からこれを排除することは不便ではないか、したがって、それについてはより柔軟に対処したいと、あなたは論じていらっしゃるようですが、あなたはその留保のはらむ、重大な意味合いがお分かりにはならないのでしょうか。その危険は二重にあります。第一に SIL は私的なもので、中立的なものではありません。SIL は公表はされない、と答えられても、それでは第二の危険については、どうお答えですか。すなわち、作業者が SIL を使用するとなると、第2サークルの作業は独立的な性格を失い、第1サークルで作業する同一の人物が、結果的に第2サークルで作業し、ないし監督するということにならないでしょうか。実はその仕事の中に、SIL は以下に論じ

る「概念」を、その余波としてもち込むことになるのです。概念というものはひとたび確立されると、ただちに仕事全体を支配することになります。となると、刊行の目的のためにその成果を書き直すことは、ほとんど不可能事であるといえましょう。かくて第2サークルは第1サークルの付録という仕儀に相成ります。この結末の害悪については、「概念」を論ずる際にふれることにいたしましょう。ここではただ、次の疑問に留意されることを懇願するにとどめます——独立の精神をもつ言語学者が、もし研究を指導するとした場合、第2サークルで一体、SILを必要とするだろうか、あるいはその指導下のスタッフに使用させるだろうか、という疑問です。ちなみにここでSILというのは、通例仕事を進めるとき、だれしも私的な操作面で考案するような、便利な省略形を意味しているのではなくて、特定の、ある「国際補助言語」から翻案した特定のあなたのSILを意味しています。

「概念」

この場合、まず以下の三つのことが区別されましょう。(1)「概念」ということば、(2)いろいろな「概念」のために使用される「operatives」のような用語体系・命名法。(3)第1・第2サークルの両者に共通する基盤としての、全体的概念の原理。(1)は、(2)と(3)との関連がなければ大きな問題ではありません。次の(2)に対する私の強い反論は、他でもすでに述べてきたところですが、要約すると、当座の間、ほんのわずかな人たちの間で愛好されていた概念的用語が、そのサークルのもつ諸目的の一つ——すなわち、専門家にも一般の人びとにも役立ちうる、その諸結果の独立した価値——を、台なしにすることになるということです。本サークルの立派な価値を、このように全く駄目にしてはばからない人は誰さまであれ、IALAを通じて世界に貢献する絶好の機会が、いま手の届くところに来たのだ、ということ悟りえない人でありましょう。ところで、あなたは、(2)についてはほぼ承認されるお気持ちのようですが、(3)については固執されているように見受けられます。しかし(2)は(3)よりも、まだ害の少ないほうです。(3)がひきおこす難点は、(2)のそれを遥かにこえるものです。(2)が、前にふれたよう

に、第2サークルがその目的の一つを達成するのを妨害する程度であるのに対し、(3)はサークルの存在理由そのもの——即ち、第1サークルからの独立——をあやうくするからです。概念的用語をいくつか手控えたとしても、概念的原理自体が、両サークルの基盤となっているなら、あまり大きな心の救いとはなりません。水門は第1から第2へと開かれます。そして概念的な観念が、第2サークル全体を支配しその細部全体に浸透します。そのような仕事は、研究上の後継者を当惑させるうえに、部外の世界にとって、万一役に立つことがあったとしてもそれはとるに足らぬものだろう、と指摘したとしても、その程度では、その比較的に小さい害悪を指摘するにとどまるものです。当サークル自体は犠牲とされてしまい、一方、当のIALAは、自らが痛切に必要としていた、始めて手にする武器の一つで、わが身を武装する機会をも剥奪されてしまって、かつてないほど程遠く、その当初の目標から放逐されてしまうことでしょう。

私はここで、第2サークルで用いるべき用語体系について、再び私の提言をあえて申し述べたく思います——その主たる区分については、昔ながらの品詞を、そのもろもろの欠点にもかかわらず、可能な限り用いるべきです。ただ、各区分の下位区分については、その配列はアルファベット順ではないでしょうから、その順序が完全に論理的ないし自然である限り、ほぼ概念的な配列が、必要に応じて採用されてもよいでしょう。しかし、下位区分のために用いられる、目じるしとなる用語は、可能な限り素朴で、非専門的な語にすべきだと考えます。そのような手順をふめば、その成果は、後進の研究者および部外の人たちにとり、独立した価値をもちうるのみならず、サークル自体の独立した存在と生成発展をも、保証するように私には思えるのです。

この時点で、「言語の基盤」という用語についての、あなたの譲歩を別にすれば、私たちは以前と同じ状況下にあるといえます。つまり、あなたのお考えが、お手紙の日付、10月30日の時と同じであるなら、私は、貴委員会での私の任務の断念をここに更新し、サークルについての私の提案を撤回す

る以外、私に残された道はないと思います。

しかしながら、これで問題がすべて決着したわけではありません。ここで、伏して想起していただきたいことは、私の提言と異論の経緯と、その一貫した動機であります。私の念願は、常に IALA の宣言した目的を促進することでした。しかし私が、その活動の実情を見聞し、IALA がその仕事を達成する見込みがほとんどないだろう、ということ痛みをもって実感したのは、ほんとうに徐々にでした。また私が、少なくとも協会の明言したゴールの方向へ、研究のコースを転換する、多少とも具体的なプランを形成しえたのも、同様、ほんとうに徐々にでありました。このようなプロセスを経て、私のサークルに関するアイデアは進展したのです。ともあれ、過渡期の手段として、このサークルにかかわる原則の貫徹を、私は強く主張します。私はこの原則の貫徹に身をかけているのです。しかし、同じ原理が、さらにすぐれた頭脳によって考案された、よりよきプランによって、さらに、よりよく達成されるということは考えられることであり、それは私の心から歓迎するものです。しかしサークルは、どんなものとなるにせよ、全体としての IALA の仕事が、もっと合理的に組織されるに至るまでの一つの掛け橋にすぎません。指揮系統の再編成という、この基本的問題が、未着手のままに放置される限り、私の提案する過渡的な手段は、ほとんど意味がないばかりか、過渡期の手法であるという、その目的からすら逸脱するおそれがありますから、いっそのこと、私の提案の精神に反する立場からそれらが試行される以前に、全面的に撤回するのが一番よいと考えるわけです。そして私の提案プランと共に、遺憾ながら、私は引き下がります。IALA が公衆に負うた義務を果たすことにはほぼ絶望しつつ、貴委員会を去ります。また私としましても、その運営の仕方から観察して、究極的にまず不毛であると判断せざるをえないような主義・主張のために、私的な立場で縷々説明する時間を割き続けることは、實際上、不幸にしてほとんど不可能な現状であります。

私に対し、引き続いて協力してほしい、そして第2サークルの仕事の指導に参画してほしい、とのご要請には深く感謝いたします。前者については、

私はすでに私の立場を申し述べました。それはまた、後者の解答に連なります。しかし再度、つけ加えさせていただくなら、私は言語学者ではありませんから、私が、特別に言語に関わりをもつ仕事になんか直接的な関係をもつことは妥当ではないでありましょう。この点に対する御高配に対してはまことに有難く存じますが、IALA の名前と利益のために、これはまさしく、ご辞退すべきだ、と存ずる種類の事柄です。私がこれまで、ひとえに努力して参りましたことは、(すべて私の責任において) IALA の課せられた明確な義務に則して、研究の組織についての一つの概略的なプランを、提言することでありました。研究自体は、広くその道で認められ、人びとに尊敬と信頼の念をおこさせるような専門家によってのみ指導されるべきだ、と考えます。

敬具

* 書簡⑦の注、参照。

November 29, 1929

Mrs. Dave H. Morris,
19 East 70 Street,
New York City.

Dear Mrs. Morris:

Your full letter of October 30 shows clearly, it seems to me, that the disagreement between you and me is at once very simple and very fundamental. It is probably because I failed to show how simple it all was, that you do not see how fundamental it is.

The chief point of my letter was that the direction of the work of IALA be reorganized in accordance with its public commitments. This would result in entrusting the linguistic, the educational, the financial, and other branches, of the direction to persons with special training or aptitude in the respective spheres; specially the linguistic branch, which most concerns us in our correspondence, could be properly directed only by a person who was at once a well-trained and well-recognized philologist and widely known as neutral as regards questions of IALA. These branches should be so organized that their heads would not only be really active, but also be fully responsible for their conduct. Over the college of these directing heads there should be a clearing office, whose function should be, not to meddle in details in the several branches, but to coordinate their work and combine its results. If

continually interfered with, it is obvious that any person would soon cease to give his best to the directing of his branch; even if IALA did not lose his service altogether, it could no longer enjoy his true interest in his work or his sincere regard for itself; it is this kind of silent demoralization that often leads cooperative enterprises to real failure under an appearance of promising progress.

If a reorganization were accomplished, such difficulties as are troubling us would not arise or would be solved of themselves. On the contrary, so long as there is no rational direction, there is manifest danger, not only that friction (probably mostly silent and ominous) would be continual among the people, but also that the avowed good purposes of IALA never would and could be realized. I think it more than likely that already the same thought is more or less conscious in the minds of many persons in and out of our Association.

This was the chief problem. The circles which I took the liberty to propose might be viewed as my personal suggestion intended as a bridge from the present form of direction to a new one; that is, the circles might be begun now and constitute a smooth transition to the later organization. And in order that the recommended work be started now, it has seemed to me of the very first necessity that the fields of research which are defined and separated should be guarded against all danger of being confused; for work imbued with the spirit of the past would not be a bridge leading to a new shore, but only an extension of the old ground. Indeed, neither the outside world nor any body of scholars could use a material handed to it which was confused or was in any way colored by personalities; and the effort that had been expended in the preparation of material of such nature would have been mostly wasted. If, on the contrary, the circles were pursued separately, the result of work done at least in the second circle would be of distinct value to the world, and one of the necessary equipments of any later organization of IALA. Here the only hope of success lay in independent and impersonal work.

I saw with alarm that the circles would not be the distinct circles which I had proposed, and would not be of a character to save IALA from the perils toward which I believed it was tending. I therefore revoked all ideas of circles; for I should keenly regret that I had at all suggested them, if my name were to be in any way associated with altered circles pointing toward the direction from which it had been my very purpose to save research by means of my circles. I did revoke my propositions and did resign my place on your Committee. But in view of my obvious failure in explanation, I feel that I should make another attempt to clarify some of the points involved.

The chief circle that engages your attention now is the second. The first circle had been begun before it was conceived as a separate circle, and therefore did not have a well defined character; I would leave it to remain as it was and to go on in the same way, but

would differentiate a second and later circles from the old comprehensive plan, and propose that these later circles be independent from the first and coordinate with it. Now we shall confine our attention only to the second circle, for the difficulties discussed in your letter of October 30 are all due to a lack of understanding of this circle.

I have not made it clear to you that there is nothing more essential about the second circle than that, as a circle of purely objective comparison, it should be absolutely independent and strictly neutral: independent in its direction, in its work, and in the value of its results; neutral as well in its actual work as in its publications. The very life of this circle is its thoroughly neutral character. *If you would salvage the research work of the Association and carry it to a higher plane, this circle is needed; and it is needed only and solely for its neutral and objective character and for its exclusion of personalities.* These issues would be as clear as day, and this task would be pursued as a matter of course, if there were a directing office of research under a philologist who was trained and also impartial; it would be as natural and inevitable for him to order and direct objective comparative studies in this circle as it is for a fish to swim.

Now I wish to show you that the reservations you make in your letter are not a matter of "subsidiary importance" or of "words and phrases we use differently", but, on the contrary, oppose the very nature of the circle and would destroy it from its foundations.

In short, you seem to concede that the term FL be limited to the first circle; but you would keep an "open mind" regarding the use of SIL in the work of the second circle, though not in its publications; and you are puzzled as to "notions". I shall try to discuss as briefly as possible the three points, FL, SIL, and "notions":—

FL. You began by calling by this name the work started at Chicago; and you evidently were inclined to use this same term for the entire future research. Here are two different things: the work done, and the work to be done. I accepted the first, namely, the work done: and, seeing that its nature was something like its name (FL), suggested that its continuation be regarded as the first circle under that name, and be separated from other circles bearing other names. Now the natural meaning of the words "foundations of language" seems expressive of the work of the first circle thus marked out, but not appropriate for that of the other circles. Neither comparative nor synthetic work could be properly called "foundations of language" ("language" in the singular and without any adjective). And it seems to me that something more than a name is involved here: the use of the term FL for the circles which are strange to its verbal meaning might also indicate a certain confusion of thought, and involve a certain interference with the direction of the second circle by that of the first. *That would be fatal for the second circle. Since you seem to concede the use of the term FL for the first circle only, further argument seems unnecessary.*

SIL. You argue that, while SIL should not be used in publications, it would be inconvenient to exclude it from the actual work of the second circle, and you would therefore have an open mind about it. Do you not see the serious implications of your reservation? The danger is twofold. In the first place, SIL is personal and is not neutral. If you would answer that SIL was not intended for publication, what would you say of the second danger, namely: the use of SIL by workers would mean that the work of the second circle would not be independent, but the same person would be working or directing the work here who worked in the first circle. Into the *work*, SIL would bring in its train the "notions" discussed below; the "notions", once installed, would at once rule the entire work; then it would be said that it was nearly impossible to recast the results for purposes of *publication*. So the second circle would end in being an annex to the first. I shall touch on the evils of this outcome when I discuss the "notions". Here I only beg you to note this question: Would an independent philologist, if he were directing research, need SIL in the second circle or have it used by his workers? By SIL, I do not mean such convenient abbreviations as any worker might devise in his private operations, but specifically *your* SIL adapted from an IAL.

"Notions". Here are three things which may be distinguished: (1) the word "notions"; (2) the nomenclature, like "operatives", used for various "notions"; and (3) the whole notional principle as the common basis of both the first and the second circles. (1) would be a slight matter but for its connection with (2) and (3). My strong objections to (2) have already been voiced elsewhere; in short, the use of notional terms which were favorite at the moment with only a few persons would be to defeat one of the aims of the circle, namely, the independent value of its results for both specialist and layman. Whoever might gain by thus defeating the worthy aim of the circle would have failed to realize the splendid opportunity which had come within his grasp to serve the world through IALA. Now you seem to be willing to concede more or less about (2), but to insist on (3). But (2) is a lesser evil than (3). The difficulty which (3) would create would exceed by far that of (2): while (2) would, as has been said, prevent the second circle to attain one of its objects, (3) would attack the very *raison d'être* of the circle; namely, its independence from the first circle. It would be but a small comfort if only some notional terms were eschewed, when the notional principle itself was the basis of both circles: a flood-gate would be opened from the first to the second; and notional conceptions would control the entire second circle, and penetrate to all its minute parts. To say that such work would greatly embarrass later workers in research and would be of little use, if any, to the outside world, is to point to its smaller vices. The circle itself would have been sacrificed, and IALA been deprived of an opportunity to arm itself with one of the first weapons it sorely needed, and driven from its original aim farther than ever before.

I again venture to submit my suggestion as regards the terminology for the second circle:—for its main divisions, the time-honored “parts of speech”, with all their faults, should be followed as far as possible; but for the subdivisions in each division, since their arrangement would not be alphabetical, more or less notional arrangement might be employed according to need, so long as the order seemed perfectly logical or natural, but the guiding terms used for the subdivisions should be in as simple and non-technical words as possible. Such procedure would, it seems to me, not only invest the results with an independent value for the later workers and the outside world, but also insure the independent existence and growth of the circle itself.

At this moment, aside from your concession in regard to the term FL, we seem to be where we were. . If your mind remains the same as it was on October 30, the date of your letter, I shall see no other course of action open for me but to renew my renunciation of my place on your Committee and withdraw my proposition of the circles.

This is, however, no longer the whole issue. Here I beg you to recall the progress and the whole motive of my propositions and objections. My desire has always been to further the announced purposes of IALA. But it was only by degrees that, as I followed the actual trend of its career, I was pained to realize that there would be little likelihood of IALA accomplishing its task; it was also by degrees that I was enabled to formulate a more or less concrete plan to divert the course of research into a direction which would at least point toward the avowed goal of the Association. It was thus that my idea of circles was evolved. As a transitional measure, I would insist on the principles involved in them, and am committed to them; but it is conceivable that the same principles might be served even better by a better plan devised by a superior mind, which I would welcome with all my heart. But circles, whatever they be, would be only a bridge to a more reasonable organization of the work of IALA as a whole. So long as this fundamental question of the reorganization of direction remains untouched, the transitional steps I propose not only mean little, but are in danger of being diverted from their object of being a transitional measure, and should best be withdrawn altogether before they are tried from a standpoint which is antagonistic to their spirit. And together with my proposed plan I would regretfully withdraw myself. I should leave your Committee with very little hope for IALA ever discharging its assumed obligations to the public. As a matter of fact, also, I am unfortunately in a position in which I can hardly continue to spend time in personal explanations in a cause which, from the manner in which it is conducted, I cannot help regarding as ultimately futile.

I thank you sincerely for your desire for my continued service and for my participation in the direction of the work of the second circle. As regards the former, I have stated my position. That also disposes of the latter; but I may add once again that, not being a linguist,

it would not be legitimate for me to have any direct share in special linguistic work. For the name and interest of IALA, this is precisely the sort of thing that I should deplore, much as I would thank you for your consideration in this instance. All I have tried to do has been to suggest on my responsibility a plan of organizing research in broad outlines in conformity with IALA's clear duties; the research itself should be directed only by specialists who are recognized as such and whose work would inspire respect and confidence.

Faithfully yours,

⑪ モリス夫人-5 1929(昭和4)年12月30日〔タイプ原本・イェール大学図書館所蔵〕

〔前文略——訳者〕

ご指摘の「主要な問題」の実状に関しては、先生がその「危険性」をきびしく認識されるずっと以前から、いかに私の心を悩まして来たかを、行間から読み取っていただけたらと希望するものです。先生のご認識は、それを改革しようとして果たしえず、のびのびになっていた決意を速めるものです。その改革を遅らせた、いくつかの理由についての私の説明(むろん、そのほかにも理由はあるわけですが)は、不可抗力的なもろもろの情勢が、そもそも本質的に困難性をはらむ状況を、さらにいっそう困難なものにしたことを示すものです。と申しましても、私としましては当然私の負うべき責任の一端からも、逃げる意志は毛頭ございません。ただこれらの事情のご賢察によって、先生がいかに切実に必要な存在であるかということと、この時期に先生に手を引かれるようなことがあったら、目をおおうような破局となりかねないということの一端を、ご理解いただけるのではないかと思います。一度、ゲストとしてお越しくしませんでしょうか。そしてこの改組の問題と MLR* の問題を、前向きに、はるか前方を見すえて、新しい合意の基盤にもとづいて、ともに協議しようではありませんか。克服すべき障害はなお少なくありません。その路も平坦ではありません。先生は、いくつかの可能な第一歩をお示しになりました。その線でご指導を仰ぎたいと存じます。

先生の深いご思索と暖かいご援助に対して、深甚なる謝意をこめて

アリス・V・モリス

(デイヴ・H・モリス氏夫人)

[追伸, 手書き] 夫とともにクリスマス・カードに御礼申し上げます。いずれにせよこれは [良いお返事] だと考えます。船はまさに出帆するところです。

*MLR...Meeting of Linguistic Research (言語学研究集会)

19 East Seventieth Street

New York

Dec. 30.

[p. 3]

I hope you will be able to read between the lines how very troubled I have been about the actual situation of your "chief point" even long before your stern recognition of its "dangerousness". Your recognition is a speeder-up of a long standing determination to change it. I hope that my explanations of some of the reasons which delayed the change (and of course there are others also) show that circumstances beyond our control have made an intrinsically difficult situation even more difficult. At the same time, I do not wish for a moment to escape from any blame which may justly be mine. Perhaps all this may help you realize how tremendously needed you are and what a catastrophe it would be to have you withdraw at this time. Will you not come and be our guest and let us confer together about reorganization and MLR, on the new basis of agreement, looking forward, ever forward. There are still many obstacles to be overcome and the path is not easy. You have pointed out some possible first steps. Will you not guide us in them?

With profound appreciation for all your thought and help,

Sincerely yours,

ALICE V. MORRIS

Mrs. Dave H. Morris

Mr. Morris and I send you many thanks for your Christmas card. I took it as a good anyway [sic]—The ship goes sailing on!

Editors' note: The post scriptum is handwritten.

⑫ 朝河-7 1930(昭和5)年1月6日〔タイプ控・イエール大学図書館所蔵〕

親愛なるモリス夫人

11月30日付のご書面を拝見して、私がしばしば考えていたこと、すなわち、ああ、私は何という出過ぎたことをあなたに書き送ってしまったことか、ということを変更して痛感いたしました。きわめて書きにくいことを、まさに私は決行してしまったのです。ただ、あなたのお手紙はそれを私に痛感させたのみでなく、それ以上のものを含んでおりました。私が頑迷かつ傲慢で、貴委員会ではたえずいら立たせ妨害するイヤな委員だと、あなたが私を断罪され追い出されても当然のことですのに、それどころか、あなたは私の異常な行為を看過されるにとどまらず、私の提言と異議をすべてお認め下さろうというのです。あなたは無礼に報いるに寛恕^{かんじよ}をもって答えられ、現時点での、私の辞意のほとんどすべての根拠を除去してくださいました。

このような次第で、私としましては今のところ IALA に止まるほかはありません。しかしながら私は、貴協会に対し、生来の不明以外に、二つの理由によってあまりお役には立ちそうもありません。一つは時間の不足で、これは私にとり重大な難点の一つです。もう一つは、以下にご説明するような不確定さで、やはりこれ以上の継続を不可能にする成り行きの原因となりかねない因子であります。

あなたのご提案により、いま、私の二つの論文のコピーを作成中です。この素案は修正の余地がありますので、その中の一つ、「言語の基盤」の序論の一節の部分のタイトルを、非公式・私的な性格を暗示するタイトル名(正確には覚えていませんが)に変更いたしました。1週間以内に、各25部ないし30部のコピーをご送付します。なお、IALAの公式用箋の上部に記載されている方がたの住所を当方まで送付して下さるよう、秘書に指示していただけないでしょうか。私の試案のコピーを送りたいと思いますので、

今のところ、まだ明確ではないけれども、やがておそらく最も重要な問題となるであろう点は、IALAの指揮系統を完全に編成し直すべきだ、という

私の見解に、どの程度あなたが同調して下さるかの問題です。言語研究の指導面のみを、この際改革すべきだと提案されても、あなたが、IALAの事業のこの分野で、どの程度の改革をご計画かよく分かりません。言語研究は、単に第2サークルだけでなく、全サークルを包括するものですから。

第2サークルに関しては、少なくともその始めの部分だけでも、ヨーロッパでの来るべき会議に参加する人たちに提示できる程度の成案を作成しうる言語学者を物色したいとのご趣旨かと存じます——今のところ、私たちの言語研究のサンプルとして、というより私たちの事業プログラムの一環としてすら、提示できるものはほとんどない現状なのですから。私の解釈に間違いはないでしょうか。もし、間違いないとすると、あなたは第2サークルの全体ですらない、その第2サークルの中の、一小部分担当の、一時的なディレクターを求めておられることになります。

では第1サークルについては、どのようなご案をお持ちでしょうか。

IALAの他の部門については、いかがなされるおつもりでしょうか。

ヨーロッパ会議の準備作業の問題に立ち戻りますと、新ディレクターは、どなたが引き受けるかはともかく、あなたのご出発前に残された、わずかな時間内にいったい何ができるだろうかと、ちょっと見当がつけがたいのではないのでしょうか。その会議がないのでしたら、たぶん継続的かつ前進的な作業について、立派なプランも作成できましょう。しかし会議に間に合わせるためのものとなると、そのようないいプランになりえないことは十分考えられることです。この種の準備としては、いったいどれほどのことができるでしょうか。

もっともあなたが、もし会議のはっきりした目的について、明確で強固な考えをお持ちならば、その時に限り、その人物がとにかく、この要請に答えるべく努力を払うことはありえませんが。もしあなたが、やはり今が会議開催のタイムリーな時期であるとお考えなら、着実な、完全に実行可能な計画を立て、この作業を第2サークルの明確な不可欠な部分たらしめねばなりません。そのような綿密なプランを構築されたでしょうか。一刻も猶予のな

い緊急の問題のように思われますが。

ファイフ氏については個人的面識はありませんが、当地の友人から得た情報では、学者としても教師としても、また組織能力からも総体的にバランスのとれた人物のようです。もっともこれら三つの側面のいずれかにおいて、傑出した人物とまではいかないかもしれませんが、ヘンモン女史の面接結果を知りたいものです。もし彼が無理でしたら、当地で適当な候補者を得るべく、努力してみたいと存じます。いずれにしても、だれであれ多忙な人物にとり、この種の作業に専念するには、残された時間はあまりに短いのです。

御宅へのご招待、まことに有難うございます。日曜日だけは (12 日を除いて)、日帰りで参上できそうです。実はこれとても、かなり困難なのですが、かなり事前に知っておれば、別な日も不可能ではありませんが、各週の初め 4 日間、(月曜から木曜まで) は絶対無理です——1 分刻みの日程が組まれていますので。

新年に当り、あなたもご主人もどうぞご健康で、ご一家にとり幸ある 1 年でありますように心から祈念いたします。そして私たちの IALA 問題についての率直な意見の交換が、私たちの心^{たの}しい個人的な接触——これに対しては、私は常に感謝の念で一杯なのですが——に無関係であるよう、また関係がありえないことを、私は祈っております。

敬具

January 6, 1930

Mrs. D. H. Morris,
19 East 70 Street,
New York City.

Dear Mrs. Morris:

Your letter of November 30 again makes me realize what I have often thought to myself, that is, with what hardihood I did presume to write to you. While it is true that it was very difficult to write as I did, the fact is that I did dare so write. Your letter shows something more. You would have been justified in regarding me as obstinate and arrogant and in casting me out as the continually irritating and obstructing member of your Committee;

but, on the contrary, you not only overlook my extraordinary conduct, but also accept all my suggestions and objections. You answer injury with grace, and remove almost all grounds of my withdrawal for the present.

Such being the case, I have no choice but to stay in IALA's service for the moment. I fear, however, that I shall be of very small use to the Association, for two reasons, besides my native inability. One is want of time; this is for me a serious difficulty. The other reason is the uncertainty which I shall explain below, and which still may cause a situation in which I should be unable to continue longer.

According to your suggestion, I am having copies made of my two papers. As the plans outlined in them are subject to modification, I have changed the title of one of them, draft for a section of the Introduction to FL, to one (I do not recall) implying its unofficial and personal nature. I shall send you within a week twenty-five or thirty copies of each. In the meantime will you kindly ask your secretary to send me the addresses of the persons whose names appear on IALA's letterhead, so that I may send them copies of my tentative plan?

The point not yet clear, which may yet prove to be the most important point, is the extent of your agreement with my view that the direction of IALA should be completely reorganized. Even if you propose that only the direction of linguistic research should be reformed at this time, I do not quite know how far you intend to go in this branch of IALA's work. Linguistic research includes not only the second but all the circles.

As to the second circle, I understand you to say that you are thinking of finding a linguist who should be able to give to the beginnings of the circle such reasonable shape as might be shown to persons who would come to the proposed meeting in Europe, since there is at present hardly anything to present to them as samples of our linguistic work or even as our program of work. Do I understand you rightly? If so, you are looking for a temporary director for a small part of the second circle, and not even of the whole of this circle.

What do you propose to do with the first circle?

What with the other phases of IALA's activity?

Returning to the work preparatory to the European meeting, it seems to me that the new director, whoever it may be, might well be puzzled to know what could possibly be done within that short time that remains before your departure. If it were not for the meeting, he might conceivably make a good plan of continuous and progressive work; but the need of preparing for the meeting might well interfere with such a plan. What can he do in preparation of this kind?

He could try to answer this question-at all only if you have a clear and strong idea as to the definite purpose of the meeting. If you still think that this is an opportune time

for a meeting, it needs a mature and thoroughly practical plan, so as to make its work a definite integral part of the second circle. Have you elaborated such a plan? There does not seem to be any time to lose.

As for Mr. Fife, I have no personal knowledge of him, but what I gather from his friends here is that he unites scholarly, teaching, and organizing ability in a happy combination, though he may not be great on any of these three sides. I should be interested to know the results of Miss Henmon's interview with him. If he is not available, I shall be glad to make such inquiries as I may here for a possible candidate. At all events, the time at our disposal is too short for serious work by any busy man.

You are very kind to ask me to come down as your guest. It seems that I can come only on a Sunday (except the 12th), returning here the same day; and even this is pretty difficult. If I knew long ahead, another day might be possible, but never the first four days of each week (Monday to Thursday inclusive), which are occupied to the minute.

I hope sincerely that the New Year finds you and Mr. Morris in good health and that it will prove a happy year for all of your family. And it is my prayer that our frank discussion of IALA's affairs will and can have no relation to our pleasant personal contacts, for which I have always been most grateful.

Very sincerely yours,

⑬ 朝河-8 1930 (昭和 5) 年 2 月 27 日 [タイプ控・イエール大学図書館所蔵]

親愛なるモリス夫人 (アキタニア号上にある)

ご短信、ありがとうございます。返送して下さったイエスベルセン氏の短信も受け取りました。

どうやら私自身のアイデアも含まれているらしい、新しい冒険の門出の途上にあるあなたに対し、心から道中の安全を祈っております。

私は、これまで数多くの会合に参加ないし出席した経験を持っていますが、会議を組織したり運営したことは一度もありません。会議の成否は主に、その人物ないし個性と、物的諸条件に依存すると思いますが、やはり本来的には、その意図と、それを実行しようとするそれ自身の意志によるものと想像するのです。お別れに当って、あえて一言申し述べたいのは、その

意図に関してであります。

まず最初に私が強く望みたいことは、今回の会議が、専ら比較研究の問題に没頭することです。その点、あなたご自身も、同じ点にねらいを定めていらっしゃることは非常に心強く思います。そして私は、あなたがその大きな影響力のすべてを傾けて、会議の論点が、この問題以外のあらぬ方向へ流されてしまうことを喰い止めてくださることを、固く信じて疑いませんし、この道こそ、現時点においてIALAの究極の目的の方向に沿う、最も直進的かつ安全な道のように思われるのです。イートン女史の支持を得て、あなたが、前例なき、最も俊敏かつ有能な操舵者であるだろうことに、私は一点の疑惑も抱いておりません。

以上のことと直接に関わることですが、同じように私が真剣に希求したいことは、ぜひこの際、国際語学者の面々に、早速にも、熱情をこめて、この仕事に協力してくれるよう説得に成功なさることです。それは、個人的レベルで事実上、彼らを味方の陣営に引き入れることにほかなりません。かくてこそ始めて、彼らは、私たちが望むことを私たちのためにやってやろう、という気持になるのです。なぜなら、それは単に、報酬ベースの研究作業などではなくて、私たちの無私の目的に真の信頼をおいて、その目的のためには、自分の秘蔵する知識と経験の宝庫を開放してくれることにほかならないからです。それは、忠実な仕事を越えたもの、まさに個人的な信頼関係の産物であります。

この目的の達成にとって、幾人かの国際語学者たちがすでに、あなたに対して抱いている、高い個人的な尊敬は大きな資産であり、その大事な出発点となるのです。残余のものは、会議中の社交的・個人的な接触によって達成されることでしょう。あなたご自身の信望とバドコック会長の才覚で、きっと成功するものと期待しています。

くれぐれも、あまり人びとを過度に働かせすぎないでください。この会議を、その快適な進行・経過ゆえに印象的なものたらしめることです。

同様に大事なことは、私見によれば、大幅な親睦ないし社交性を発揮しつ

つも、会議そのものは、明晰にして冷静な真理の光の中で、過度にわたらぬ、然るべき量の仕事の成果を上げるべきだと思います。遊びは遊び、仕事はやはり仕事なのです。この両者は、よくあるように、同時に到来しても、ゆめ、その領域を相互に侵犯せしめてはなりません。会議の参加者のタレント性とか陽気な気分が、各会期を通じ——会期外をふくめて——横溢し、会議の進行が有利に展開する、ということも考えられますが、会議において達成されるべき真の成果とは、わずかなりともすべて、真剣な非個人的な事柄なのです。工作中、微笑も結構ですが、仕事自体は妥協すべくあまりにも神聖なものです。そして仕事は往々にして、きわめてきびしいものなのです。

モリス夫人よ、願わくは、以上の招かれざる説法をお許しあれ。ご旅行中および会議進行中を通じて、最大のよろこびあらんことを。あわせて、なにとぞ過労になられませぬよう。また全期間中、個人的に心たのしまぬ出来事が皆無でありますよう、この地より祈りおります。今回の企画の成功に関しては、いささかの疑念も感じておりません。

敬具

February 27, 1930.

Mrs. Dave H. Morris,
On board the "Aquitania".

Dear Mrs. Morris:

Many thanks for your note. I have also received the Jespersen note which you returned.

As you embark upon your new adventure, in which somehow some of my own ideas seem to be involved, I bid you Godspeed.

I have taken part in or attended many meetings, but have never organized or conducted one. I imagine that the success or failure of a conference depends largely upon its personalities and its material conditions, but primarily upon its intentions and its own will to carry them out. It is only in regard to intentions that I venture to say a word or two in parting.

First of all, it is my ardent desire to see the meeting devote itself to the question of comparative study. I am very happy that your own heart is also set upon the same thing. I am absolutely confident that you will exert all of your large influence to prevent the meeting from drifting into any other channel than this one, which seems to me the straightest and

safest at this moment in the direction of the ultimate destination of IALA. With the support of Miss Eaton, I have not the least doubt that you will be the most vigilant and effective pilot that ever was.

Directly in connection with this is my equally earnest wish that you would succeed in persuading the interlinguists to co-operate in the task with great willingness in the immediate future. That would mean nothing short of winning them personally. Only thus would they be in a mood to do for us what we desire of them, for it is much more than a mere paid service of research, but really their trusting our disinterested aim so far as to open, for the sake of this aim, their private store of knowledge and experience. That would be more than loyal work, but personal confidence.

For this end, the high personal regard that some of the interlinguists already have for you is a great asset and an important starting point. The rest may be accomplished by social and personal contacts during the meeting. I have great hopes of success through your own influence and President Badcock's tact.

Pray do not drive the men too hard, but make the meeting memorable for its agreeable career.

Equally important, it appears to me, is that, with its large element of sociability, the conference should have a not over much but distinctive amount of work done in the clear, cold light of truth. Play is play, but work is work; let not the two ever encroach upon each other, even when they come, as they well may, at the same moment. Personalities and jovial spirit may with advantage pervade every session, as well as out of it, but what little real work is done in it should be a serious impersonal matter. Smile as one might while working, the work itself should be too sacred for any compromise. And work is often quite a rugged thing.

I beg of you, dear Mrs. Morris, to forgive all this unsolicited homily. I wish you the greatest pleasure in your voyages and throughout the conference. And my prayer is that you will not overwork yourself, and that there will occur no event unpleasant to yourself personally during the whole period. As for the success of your enterprise, I feel no doubt about it.

Very sincerely yours,

⑭ モリス夫人-6 1930 (昭和5)年3月4日〔自筆原本・イエール大学図書館所蔵〕

英国汽船アキタニア号にて、1930年3月4日

親愛なる朝河教授

お届けいただいたお手紙は私に新鮮な勇気を授けてくれました。感謝の気持は到底言葉では言い表わせません。前方に横たわる仕事は困難を極めているかには見えますが、その途上にはいくつかの標識灯があり、その中でも最も明るい灯火のいくつかは、先生が掲げてくださったものです。船旅は順調でした——ただ1回の物凄い嵐を除いて、あまりにすごいので完全に廻れ右して、12時間もの間「船を止めた」ほどでした。16年ほどの就航の歴史上、初めての事件だそうです。それにしてもアキタニア号は最高です。

私はおかげ様でたいへん元気でやっています。そして、ただ睡眠と仕事一本の繰り返しの隠遁生活を十分に堪能しました。お手紙ほんとうにありがとうございました。

アキタニア号船上にて

アリス・V・モリス

On board the CUNARD

R.M.S. "AQUITANIA"

March 6, '30.

Dear Professor Asakawa,

Your letter, delivered by hand, has given me fresh courage. I thank you for it more than I can say.

The task ahead looms very different, but there are beacon lights along the way. You have lighted some of the brightest.

The voyage has been good but for one terrific storm, so terrific that the ship had to be "hove to" for 12 hours right about face, —the first time in its history of about 16 years. She is magnificent. I have kept very well, and thoroly enjoyed a hermit life of just alternating periods of sleep and solid work.

Thanks again whole-heartedly for your letter.

Sincerely,

ALICE V. MORRIS

⑮ 朝河-9 1930 (昭和5) 年5月15日 [タイプ控・イエール大学図書館所蔵]

親愛なるモリス夫人

ご丁寧なご書簡，有難く拝見しました。ジュネーヴに相会した高名なる学者諸氏が——私が修正して下さるよう申し出ていたにもかかわらず——私の言語研究の全体的プランを修正することもなく，満場一致してその諸原則を承認し，その基盤の上に研究プロジェクトを作成する運びになったのは，私の驚きとし，名誉に感ずるところであることは申すまでもありません。そのような結果をだれが予測しえたでしょう。専門家諸氏が，いわば盲人の提出した企画を承認しそして練り上げたという一事は，まさに異例な光景であります。このラッキーな結果は，あなたの勇敢なる擁護活動によるところ大であることはほとんど疑いありません。

しかしながら，この輝かしい成功——事実その通りですが——すらも，私にはさして重大ではないように思えます。なんとなれば，それは単なるプログラムにすぎないからです。マーシャル・ホッホがいみじくも申しましたように，アイデアは問題ではない，意志と行動こそが重要なのです。現在，私たちが当面する問題は，不屈の意志とそれを執行する適切な道具立ての必要であります。

さて，わが委員会の委員長に対し，副委員長として率直にいわせていただくなら，まずサピア氏がその時間とエネルギーを，この種の仕事に充当することをいとわぬ理由が私には解しかねるのです。特定の研究分野をわが定めとし，多忙な学者生活の中で，いかばかりか歳月の早さを痛感されておられるにちがいない氏が，別個の研究分野のために，貴重なる1年間，半日労働を提供するというのは驚きです。それはもちろん，私たちの問題ではありませんし，また私も，この言語研究の指導という，特定の職務に対するサピア氏の（知的ならびに個人的）資質について，直接的な知識を十分備えてはおりません。私の知っていることは，彼が，言語学において数々の業績をもち，また俊敏な頭脳の持主であるということだけです。

彼の意中にあることは、もちろん、彼がこれまで私たちのためにしてきた仕事の継続でしょうし、彼が自分のえらんだ仕方ですそれを続行できるのなら、彼自身の仕事に多少の役には立つでしょう。しかし、彼の以前の仕事とは大きく相異なり、彼個人にとっても程遠い関心事かもしれぬ比較研究を指導することは、はたして彼の興味を喚起するのでしょうか。

それはともかく、もし彼が乗気なら、彼の提供する期間、すなわち1年間やらせてみてもよいでしょう。

重要なことは、もし彼を雇用するとしたら、あらかじめその当初に、比較研究の指導者になるかどうかを尋ねることだと思います(1年間では、他の研究面へはとて手が廻らないでしょうから)。この点については、いささかもあいまいなことがあってはなりません。MLRで作成したプログラムを送付しておけば、何を期待されているか、判然とするでしょうし、さすれば彼は、諾否をはっきりいうことでしょう。

この点をはっきりと確認して、比較研究の遂行について委任した後、次に肝要なことは、その職務遂行期間中、可能な限り、自由な裁量を許すことだと考えます。それがだれであれ自尊心をもつ学者に、その最良の仕事させる唯一の方法はこれだ、と信じているからです。実際的な事柄については、ファイフ氏に相談することもあるでしょうが、こちらから干渉すべきではありません。彼がまた、ご提唱の定期刊行物の編集責任者となった場合も同様です。

なお、編集作業についても、一言申し述べさせていただきたいと存じます。この種の仕事は、一般の人びとの予想以上に、はるかに多くの時間と労力を必要とするのが常であり、その仕事の大部分は学問的であると同時に、実務执行的な性格をもっています。ですから研究面の指導と編集面の指揮を、この際、同時にサピア氏に依頼するのは賢明ではないように思います。万一、両方の兼務を同氏に委嘱する場合には、2分野の活動のうち、どちらかの分野の仕事の大部分を、別な人たちに委託せざるをえないであります。

ここであえて提言いたしますが、イートン女史の同意を得て、彼女を両分野の副主任とすることです。これまで彼女は、教育面での研究を担当し、見事な仕事ぶりをみせました。しかし私はつねづね彼女の卓越した鋭敏な知性を、その真の造詣と関心の存する領域において、IALA が利用しない法はないと、いつも強く感じて来ました。教育的研究面では、彼女の知力はほんの一部分しか活用されておらず、それは実にもったいないことなのです。彼女のその側面での貢献は大であり、引き続きその役割を果たしていただきたいのは山々であります。かねがね感じてきたことは、彼女の活動の領域をただその側面だけに局限してしまうというのは、きわめて残念だということです。そのうえソーンダイク教授が、その立派なお仕事を私たちのために、いつまでも続けてくださるかどうかも、私は疑問に思っています。

サピア氏とイートン女史が手を組んでこそ、本件は現時点において考える最高の布陣を得て、その成功はほぼ保証されたようなものだと信じます。言語研究面では、彼女はその協力体制により、彼の指導を支援し、彼女自身その作業面で、実質的に研究の進展に大きく貢献をすることでしょう。一方、編集面では、彼の提案をうけて立ち、実務の執行に際しては、彼女の実際的能力で彼の意図を補充・補完することでしょう。

イートン女史のもつ、鋭敏で透徹した知力を、彼女の同意を得てこの際、最高に発揮できるような方法で、私たちのために役立たせてもらうべきです。私が提案するこのコンビ体制は、私の考えでは、その目的実現には理想的なものです。もしこの提言が実行されるなら、単にプログラムを提案したことなぞよりも、IALA の真の利益のために私は、より大きな貢献をしたのだという実感に浸ることでしょう。

学年の終わりには、論文、学期末レポート、試験、会合等の重荷が加わります。この週末には、ほかに何もすることができないことが残念です。もし、あなたがバー・ハーバーに出かけられる以前に、会ったほうがよいとご判断でしたら、その日取りは、あなたがお留守になる次の週末と私の多忙な日々とのあいだ、つまり 23 日の金曜日以外にはないと思われれます。午後早々に

出発し、当夜遅く、または翌朝早々に帰宅することは可能ですが、ご都合はいかがでしょうか。

ジュネーブでのお仕事で、過労になられなかったことを希望するとともに、IALA の予算獲得のご心配にめげず、どうぞお元気ですごされますように。

敬具

May 15, 1930

Mrs. D. H. Morris,
19 East 70 Street,
New York City.

Dear Mrs. Morris:

Many thanks for your very cordial letter. I need not tell you that I was surprised, and felt honored, to see that the distinguished scholars assembled at Geneva, did not, as I had suggested, revise my entire plan of linguistic research, but so unanimously accepted its principles, and proceeded to draw up projects of research upon its basis. I had never anticipated such an outcome. It was a singular spectacle that specialists should approve and elaborate, as they did, a scheme submitted by a blind man. I have little doubt that the happy result is in a large measure due to your valiant championship.

But even this signal success, as it is, weighs little in my mind, for it is only a programme. As Marshal Foch has well said, ideas are nothing, but will and actions are everything. What now confronts us is the need of an indomitable will and of adequate instruments to execute it.

Now, if I may speak frankly as Vice Chairman to Chairman of our Committee, I do not understand the reason that Mr. Sapir should be willing to divert his time and energy to this sort of thing. It surprises me that one who has a chosen field of work should, realizing how swiftly the years pass in a busy scholar's life, spend a half time for a whole valuable year in another field. That, of course, is not our affair. Nor do I have sufficiently intimate knowledge of Mr. Sapir's qualifications (intellectual and personal) for the specific duties of the directorship of our linguistic research. All I know is that he has attainments in linguistics, and that he has an incisive mind.

What he has in mind is, of course, the continuation of the sort of work he has done for us. It may be of some use to his own work, if he can carry it on in a way he chooses. But would it interest him to direct comparative studies, which are a quite different thing

from his earlier work and may be of remote interest to him personally?

If he is willing, he might be tried for the time he offers, that is, a year.

It seems to me important, if he is to be engaged, that he should be asked at the very outset if he would be director of comparative research, (for there will be no time in a year for other phases of research). There should be no ambiguity about this point. If the programme made at MLR was sent him, he would know exactly what was asked of him. And he should answer *yes or no*.

With this definite understanding and with this specific mandate to conduct comparative research, the next essential will be, it seems to me, to give him as free reins as possible during his tenure of office. I believe that this is the only way to let any self-respecting scholar do his best work. He might perhaps consult Mr. Fife on practical points, but there should be no interference. The same should be said if he was also to direct the editing of the proposed journal.

I venture to offer another suggestion regarding editorial work. This sort of work always costs much more time and labor than people suppose. And much of the work is executive, as well as scholastic. It does not seem to me reasonable to ask Mr. Sapir to undertake both the directorship and the editorship. A great deal of the work to be done in the one or the other of these two fields of activity would have to be relegated to others, in the event he was asked to assume the control of both.

I make bold to suggest that Miss Eaton, if she consents, be requested to be the chief aide in both fields. Heretofore she has been engaged in educational research, and has done splendid service in it. But I have always felt strongly that her unusually keen intellect should be drawn upon by IALA in spheres where her true attainments and interest lay. In educational research her mind is only very partially used, and that is nothing into the brain [*sic*]. Her service in it has been so valuable that she might be asked to continue to render it, only it would be a great pity, as it has always seemed to me, to confine her activity to it. And, moreover, I wonder if Professor Thorndike will be able to continue his great work for us indefinitely.

I have no doubt that Mr. Sapir and Miss Eaton together would come as near to insuring the success of the proposed tasks as any arrangement one might devise at this moment. In linguistic research, she could support his direction by her cooperation, and very materially contribute to research by her own work. In editorial work, she could take his suggestions, and add to them her practical talent in executing business.

Miss Eaton's quick and penetrating mind should be, if she would agree, made available for us at last in ways in which it could act with full force. The combination I have suggested is, to my mind, the ideal one to bring this about. If this suggestion might be carried out, I should feel that I had contributed to IALA's true interest more than I did by merely

proposing a programme.

At the end of the academic year, theses, term papers, examinations, and meetings are added burdens. I am sorry that it is simply impossible for me to do anything else at this week-end. If it seems to you desirable to see me before you leave for Bar Harbor, the only time open between your absence at the following week-end and my crowded days seem to be the twenty-third, Friday. I can leave in the early afternoon and return late at night or early next morning. Will this be inconvenient to you?

I hope that your work at Geneva did not unduly fatigue you, and that you are well despite your anxiety of realizing the budget of IALA.

Yours very sincerely,

⑩ 朝河-10 1930(昭和5)年11月16日〔タイプ控・イェール大学図書館所蔵〕

日曜日付の短いお手紙を心から感謝いたします。あの朝の、私のあの無遠慮さには、さぞ驚かれたことと思います。私があえて私見を申し述べに上がったのも、いかに私が出しゃばり屋だとはいえ、もし、あなたがいつものように、やさしく受け止めてくれる、との心の支えがなかったら、自ら課した使命をとうてい遂行できなかったことでありましょう。もし私が、あなたのお気持ちを損なうことなく、また私の動機について誤解を招くことなく、何とか目的を果たしえた——心からそのように願っているのですが——としましたら、それはあなたの心の広さによるものであり、私はここにあなたの高貴な精神に敬意を表したく存じます。

申すまでもなく、私の思いは唯一つ、あなたが、IALA という組織体の中で、その活力源としてこれまで占めてきた、中核的で名誉ある、その地位をそこなうことなく、IALA の営みをそのあるべき姿に改編すべきであり、またそれは可能でもあるという、一途なアイデアに発しております。この目的のためには——この点はみなさん、同意してくださると信じていますが——、然るべき方法により、その諸々の責任分野を分権化し、かつ、たがいに関連させることによって、もって IALA の機構を強化し、その活動を明

確に表明することだ、とこのように私は考えたのでした。即ち、IALA は、その骨格は簡素で、わかり易いものとし、その神経と筋肉組織は、その本来の仕事直接的かつ整然と遂行できるように調整・調律した、一つの有機体とすべきです。何よりも、この仕事自体の特殊性格が、その組織のあり方を決定すべきであり、この組織は、そのあらゆる部分にわたって、最大限その目的に向かって、また最大限の効率をもって、つまり組織をあげてこの仕事に協力すべきだと考えます。この基本的な原理に立脚して、私は改組についての試案を提言したわけですが、この原理の完全な実現のためには、もっといいプランも可能かと思われます。

私が提案したプランでの、あなたご自身の地位については——私が大きな思いちがいをしていなければ——、もしあなたが同時に二つのポストについてもよいと思われるようでしたら、IALA を益するところ、最大であり、あなたも快適な居心地を得られるように思われます。

その一つは、骨のおれる仕事や、細かい雑事についての気づかいを軽減するため、適当な助手たちを配備した、事業推進部の監督です。あなたは、他の何人も持ちえない、幅広い人脈をおさえておいでで、それこそこの部署が必要とするものです。

もう一つは、理事会の名誉事務局長として常にリードされてきた中心的な役割を、新しいプランの精神で続行することです。事業推進部の監督は具体的仕事ですが、名誉事務局長の活動範囲は、無限かつ弾力的なものです。その立場で、あなたは IALA の全活動と、すべてのスタッフの監督に当ることになり、個人的接触を通じ、組織のすべての局面に影響力を行使できるでしょう。あなたは、何人に対しても自由に会い、鼓吹し感化し、それでなおかつ、いろいろな部署にかかわる特定の仕事や責任によって煩わされることはないのです。すべての人があなたの判断に敬服し、あなたの示唆を進んで実行するだろうことは確実です。現行システムとの、この点での違いは第一に、あなたの活動範囲は現行下のそれに比し、はるかに容易に拡大しうること、第二に、あなたの示唆は、確立された責任機関のチャンネルを通して遂

行されることです。

全般的にその結果は、あなたの、IALA 全体への個人的影響力は、現在のやり方に比し、通算して決定的に拡大され、より快適に実現されることになりましょう。これまでは、あなたは孤軍奮闘、余りにも多様な、しかも直接的・実質的な仕事を担ってこられました。その当然の結果として、注意が及ばなかった局面では、その監督の手をゆるめざるをえなかったわけです。このことは、あなたの予期しないフリクション(摩擦)を起すことになり、一方において、結果を確かめたい部面では遅延の原因ともなるかと思うと、他方では、ある一定の時期に興味をもった領域では、影響力と責任の絶え間なき混乱の狭間はざまにあって、心労することにもなったわけです。その間、IALA 自身の本来の仕事は、大幅な遅滞を蒙り、その活動はあちこちでほんやりとかすんだり、あるいは先細りになって詰まったりという次第で、限定された分野でのみ、しかも突発的・衝動的にのみ仕事が進捗したり、ということにもなった次第です。このような事態は、ますます複雑化するすべての分野を、個人的に処理する現行制度下では、明らかに不可避的な現象だったわけですが、それにもかかわらず、IALA 全体としては不幸な事態であるといわねばなりません。IALA は成長してきたし、今後とも成長し続けるでしょうから、あなたはいずれ、とうていあなたの手には負えぬ責任に包囲される危険にさらされていたのです。ところで他方、新しい組織の下では、私は次のようなあなたの姿を想像できます。あなたは、今や整備された有機的な機構の中で、一致団結した各分野での多様な活動を、慈しみのまなごしをもって眺めています。そして必要に応じ、ここかしこで手を貸し、今 A なる人物に示唆を与え、次いで B なる人物を鼓舞する、といった工合です。具体的な責任を負うことなく、個人的な激励と刺戟を与えるという形で行うのです。その結果は、現在のような、ある時点での、ある特定分野の仕事の全側面にのめり込む一方、他の仕事はそのままに放置せざるをえない状況と比べて、はるかに心たのしく、より満足感が得られるのではないのでしょうか。

あなたの新事業推進部の監督は、特定の責任をもつことにはなりますが、あ

なたの名誉事務局長職は、責任よりも影響力を意味し、その関与する局面も、部分的で限定されたものではなく、無限定にして完全に弾力的なものです。この二つの職務を兼務することは、ついにはあなたが、あなたの当然の分け前である、IALAにおける心たのしく名誉ある地位に、今その身を落ち着かせることになるのだ、と私は感ぜずにおれません。

以上が、私の考えたことでした。よくお判りいただけたと思うのですが、再度、文字をもって確認していただきたく筆をとった次第です。

忠実かつ誠実なる友より

November 16, 1930

To A. V. M.—

I thank you heartily for your brief note of Sunday. You probably had seldom seen such an amazing piece of presumption as I exhibited that morning. I had been daring enough to propose to come to speak to you, but, impertinent as I always was, I could hardly have gone through with the self-imposed task, had I not been encouraged, as I was, by the great sweetness of temper with which, as always, you met me. If I somehow acquitted myself, as I sincerely hope I did, without wounding your sensibilities and without causing in you any misunderstanding of my motive, it was owing to your magnanimity. I do homage to your spirit.

I need not tell you that all my thought had been actuated by the single idea that the work of IALA should be and could be brought to what it should be without impairing the vital and honorable place which you, as its animating spirit, had in the organization. For this purpose, it seemed to me—and I believe people would agree with me in this—that the structure of IALA should be strengthened and its activity clearly articulated, by localizing and correlating its responsibilities in a proper way. That is, IALA should be a body of which the skeleton is simple and clear and the nerves and muscles are so attuned as to do its main work in a direct and orderly fashion. The peculiar character of this work itself should decide the organization; and the organization should, in all its parts, cooperate in this work with the greatest possible purposiveness and economy. Upon this fundamental principle, I offered you a tentative plan of reorganizing, but a better plan may be possible for the full realization of the principle.

As regards your own place in the plan I laid before you, it seemed to me, if I was not greatly mistaken, that IALA would be benefitted most and you would find the results most agreeable, if you could see your way clear to consent to occupy two positions at the same

time.

One was the direction of the division of promotion, with suitable assistants to relieve you of exertion and worry about small details. You command (contacts and knowledge of persons) as no other person visible does, and that is exactly what this division needs.

The other was the continuation, in the spirit of the new plan, of the central position you had always held as the Honorary-Secretary of the Board of Directors. Though your direction of the division of promotion would be a special task, the sphere of the acting of the honorary-secretaryship would be unlimited and elastic. There you would have the oversight of all the activities and all the persons, and be able, through personal contacts, to exert influence over all the phases of the organization. You might deal with any person and inspire and influence him, and yet would not be encumbered by the defined tasks and responsibilities of the different sections. There is no doubt that every one would defer to your judgment, and would seek to carry out your suggestions. The difference in this respect from the present system would be that, first, your activity could be much more easily extended than is possible now, and, secondly, your suggestions would be carried out through the established channels of responsibility.

I feel certain that the general result would be, in all, a decidedly greater and happier realization of your personal influence upon IALA as a whole than has been possible in the present method. Heretofore, you single-handed have carried far too varied and yet direct, actual work, and naturally have been obliged to relax your hold where your attention was not engaged for the moment. This would create friction where you did not expect, and cause delay where you would like to see results, while, in the field in which you were interested at a given time, you would be annoyed by the continual confusion of influence and responsibility. In the meantime, the main work of IALA itself would be much retarded, and its activities blurred here and clogged there, and register progress only in limited fields and only by fits and starts. This was clearly inevitable under a regime of personal work covering all fields of increasing complexity, but none the less unfortunate for IALA as a whole. As IALA grew and would continue to grow, you were in danger of being beset with responsibilities far beyond your control. On the other hand, in the new organization, I can visualize you regarding benignly over all the varied fields of the concerted activities of a well-ordered body, lending a hand here and there as you saw fit, and inspiring this person now and that person then, not by assuming a concrete responsibility, but by giving personal encouragement and stimulus. Would not the result be much pleasanter and more heart-satisfying to yourself than your present need to drive yourself through all the gamut of work in a field at a time and to be obliged to let other works stand still?

Your direction of the division of promotion would mean definite responsibilities, but

your honorary secretaryship would mean influence instead of responsibility, and be unlimited and perfectly flexible instead of being partial and restricted. I cannot help feeling that the union of these two offices would at last place yourself in that happy and honorable position in IALA which is your due.

Such was my thought, which I think you well understood, but of which I have wished to assure you again in writing.

Faithfully and loyally yours,

⑰ モリス夫人-7 1930 (昭和 5) 年 11 月 22 日 [タイプ原本・イェール大学図書館所蔵]

ニューヨーク 120 番街 525, 私書箱 118 号, 米国国際補助言語協会本部
 ニューヨーク東 70 番街 19, 1930 年 11 月 22 日
 親愛なる朝河教授

すでにご案内のように、当理事会は全員一致して貴殿が進行調整委員会の委員長職に就かれるよう期待しておりますが、貴殿がその任を受諾されるという、栄えある名誉を本委員会にお与えくださることを衷心より念願するものであることを想起していただくために、今ここに、あえて本状をもって正式に要請申し上げる次第であります。貴殿の同志にとり、はたまた事業の成功にとり、本件は重大な意義をもつものなのであります。

その職務内容は、貴殿に対して多大の時間をお割かせすることはあるまい、と考えます。ミス・イートンが委員会の一員として細部のことは処理し、常に貴殿に情報を提供する手はずになっております。当理事会といたしましては、貴殿のご名聲と、とりわけ IALA の事業の進展の過程で、終始一貫して発揮された、すばらしい省察力と卓越した判断力による寄与を、懇請したく存ずる次第です。

敬具

デイヴ・H・モリス

International Auxiliary Language Association
 in the United States, Inc.

(IALA)

National Headquarters

Box 118, 525 West 120th Street

New York City

19 East 70 Street

New York

November 22, 1930.

Dear Professor Asakawa:

It hardly seems necessary for the Executive Committee to send you a formal invitation to become, as our unanimous choice, the chairman of the Committee on Coordination, nevertheless I am doing so in order to remind you of our very sincere hope that you will do us the great honor of accepting the appointment. It will mean much to your associates and the success of the work.

I think the duties will not call for much time on your part, for Miss Eaton as a member of the Committee can take care of the details and keep you informed. We do want the prestige of your name and more especially the brilliant thought and excellent judgment which you have so consistently shown in the development of the work of IALA.

Very sincerely yours,

DAVE H. MORRIS

⑩ 朝河-11 1930 (昭和 5) 年 11 月 27 日 [タイプ控・イエール大学図書館所蔵]

親愛なるモリス夫人

今日、感謝祭の日に、24 日付の詳細にわたる機密に関するご書簡に対し、心から御礼を申し上げます。

私はまた、モリス、バドコック両氏から、進行調整委員会の委員長を委嘱したい、とのお申し入れも受け取りましたが、その件については最終的に決定された委員会の性格の如何による、という条件つきで——ほかにもありますが——お受けしたいと思います。明らかに間違っている、と考えられる方式によって組織された委員会の管理は、お引き受けするわけにはまいりません。私自身の描く、委員会のあるべき姿は今執筆中で、イートン女史に目を

通してもらってからご送付します。昨日の彼女の来訪で、委員会に関する主要な問題のすべてについて、私どもは意見が一致することを発見しました。お申出の委員長受諾の最終決定は、主として、構成を完了した時点での当委員会が、彼女と私が考えるプランと同じ原則に立脚しているか否か、にかかっています。私の去就をきめるものは、それらの原則であって、その原則と関わりをもたぬプランの細部事項ではありません。なぜなら、原則こそ、新しい委員会を創設するアイデアの根源的な理由にほかならなかつたのですから。

私が以上の事に言及したのは、貴簡にお答えするのも、同一原則に依拠するものだからであります。

これらの諸原則は、以下の中心的なアイデアに発します。つまり、IALAは成長しつつあり、その多面的な仕事を効率的かつ経済的に執行するためには、責任の明確で合理的な配分が、不可欠である段階にあるという認識です。そのためには組織の再編成が必要だ、と考えたわけでして、その改組は、新しい財務・進行調整両委員会の創設に、その顕著な特色をもちます。

いかなる再編成に当っても、フランス革命の手法をくり返すことは、賢明ではないでありましょう。ここでは伝統的制度は完全に払拭され、全く新しい憲法が、過去の遺産を無視し純粋に理論的な根拠にもとづいて作成されたわけです。やはり、より実際的な英国的方式——新鮮なアイデアや機関が、伝統的諸制度の有用な遺産とバランスを保っている——が望ましく思われます。そこでは、古きものは修正の上、新しき皮袋にとり入れられます。少なくとも、私は、プラン作成の段階でこの方式に準拠して作業を進めてきました。したがって、貴簡にご記載の、IALAの従前の組織に関するご提唱を、心から歓迎するものです。

しかしながら、まさにこの点において、眼をこらして思考の混乱を避けるべき、一つの非常に重要なことがあります。未来は、可能な限り過去の基盤の上に構築されるべきだと申しても、私の考えでは、過去のあらゆる痕跡を、それがいかに進歩の上での障害となっても敬虔に保存するべきだ、とい

うことを意味しません。それは英知ではなく、旧習墨守というべきでしょう。この混同がいかに致命的であったかは、歴史があまたの悲劇的な例を提供しています。この貴重な教訓はただちに、私たちIALAの問題とかかわりがあると私は考えます。この再編の時点に立って、願わくは、あなたも他のすべての人も、私があえて縷々ご説明した、この二つのきわめて異なったもの——過去への尊敬と、それへの隷属の二つ——を混同しないよう警戒されんことを。意識して、また毅然として、個人的な好みないし習癖を克服しようとしないう限り、後者は、いつの間にやら前者に取って代わりかねないのです。

より具体的には、CALC と CCSR* は、機関としては廃止されましたが、その仕事は、新しい進行調整委員会が肩代わりいたします。なんとすれば、その仕事こそIALAの本来の仕事であり、量的にも、また能率の面でも、向上せねばならないからです。

CALC と CCSR の両機関は、なくなるとしますと、それぞれ委員長はその任を解かれます。推進部および研究部の三つの課は、それぞれ、理事会に対して全責任を負いつつ、その仕事の管理について完全な独立性をもった管理者を迎えることとなりますが、これらの管理者以外に、委員長を配置することほど、不調和であるばかりか、各管理者の責任と独立にとって支障となるものはありません。このような配置は、過剰たるにとどまらず、邪魔になるばかりです。過去の委員長を保存することは、歴史に学ぶ知恵ではなく、過去への絆に屈服した一例となりましょう。

一時的にせよ、あなたが委員長の問題について迷いの心をもたれたのは、あなたのいわゆる、研究に関する非専門的な職務であることは明白です。あなた自身いわれるように、いったいこれらの任務とはいかなるものなのか、それらは再編成されたシステムの別な部分で、効果的に処理できるのではありませんか、あるいはまた、そのために研究主幹者のほかに委員長を配置するという明白な愚かさを冒さねばならぬような、なんらかの任務がほんとうにあるのかどうかを、とくと考えてみなければなりません。非専門的事項のうち、

あるものは全く事務的なものであり、またあるものは純粋に経営的、そしてその残りは——単に機械的に組織された機関が処理するにはいちばん困難な——個性的な人物と、個人的な人間関係に依存する事柄です。これら三種の事項のうち、最初のもののはなんら問題はありません。第二種の事項は、イートン女史と私が提出するプランに従って、調整委員会から事務局へ委託されるか、あるいは両者による共同管理ということも考えられます。第三種については、あなたがその重荷を担われ、それによって研究の一般的な遂行上、きわめて大きな貢献をなされたことはよく存じ上げております。研究部門・進行調整委員会・事務局の各責任者はむろん、すべての人が、必要あるごとに、忠告と個人的支援を求めて、あなたのところへ今後とも駆けつけるだろうことは間違いのないところです。あなたは、名誉事務局長・執行委員会および管理陣のメンバーとして、組織のルートを通して、あるいは望ましい行動のための正式のルートがないときには、個人的な資格で、十分かつ自由に仲裁する活躍の場をもつことになります。あなたが、研究などの限定された分野の委員長職に自縛する必要が、私には理解しかねます。あなたの影響力は、その義務から解放されていたほうが、その逆の場合より、より広範に、より自由に行使されるでしょう。IALA は、その全組織をあげて、そのあらゆる部分にわたって、個人的な示唆・激励と援助の手を求めて、あなたを頼りとするをやめないでしょう。あなたは、あらゆる方面から、時間を問わず（常時）、個人的な要請にさらされてしまう、とさえ申し上げたいと思います。

ほぼ同様なことが、CALC の前委員長、ダガン氏についてもいえるように思います。教育界において、かくも広範な知識と影響力をもつ人物を、なんらかの形で活用することは、IALA にとってきわめて望ましいことと存じます。しかしながら、その彼を、ソーンダイクというディレクターのほかには、教育的研究委員長として配することは、私どもにとりきわめて愚かな策であり、彼にとっても迷惑なことと考えます。IALA としてはこの際、氏から、必要に応じてその指導と支援が得られるよう、了解を取りつけておくの

もよろしいでしょう。はっきりした地位を提供してもよいでしょうが、教育的研究面の委員長として特約することだけは、避けねばなりません。

要するに、あなた自身に関しては(ご書面中の項目5-7)、いわせていただくなら、5(a)と6の前半は自明のこととなり、5(e)と5(g)はあなたとサピア、コリンソン両氏との問題であり、7と6の後半はあなたの気持次第(7のご提案はよく考えられていると思われます)。5(d)と5(f)はすでにあなたが決定されたこと。そして5(b)と5(c)は、組織再編成とともに自動的に消滅する問題です。

私はこの長文の書簡を、あなた宛の際に、次第にいまわしい習慣と化してしまっただかに思える厚かましさをもち、書き綴ってしまいました。あなたのすばらしい公明正大な精神によって励まされたとはいえ、筋道の立った弁明のことばを知りません——どうやらおおかたは、私の無神経から発しているに違いありませんから。しかし、これだけはハッキリ申し上げたい——あなたへの個人的な忠実と誠実の心がなかったら、私の、その生来の欠陥すら、このように繰り返す、遠慮なく発動されることはなかったらうということです。

CCSRにかかわる、1924年以來の私たちの交友関係についてのお言葉、ほんとうにありがとうございます。私にとり、それは私の人生における稀に見る好運でありました。新しい体制になりましても、私たちの関係が従前に比し、疎遠となる結果にならぬよう、心から希望しております。 敬具

* CALS…補助言語研究委員会(Committee on Auxiliary Language Study)はIALAの作業委員会のひとつで、ダガン氏が委員長だった。

CCSR…研究・協力委員会(Committee on Cooperative Service & Research)もIALAの作業委員会のひとつで、モリス夫人が委員長で、朝河氏が副委員長であったがこの年、進行調整委員会(Committee on Coordinatin)へと発展解消をする。

27 November, 1930

Dear Mrs. Morris,

I thank you heartily on this Thanksgiving Day for your full and confidential letter of the 24th.

I have also received word from Mr. Morris and Mr. Badcock offering me the chairmanship of the Coordination Committee. I am answering them that my acceptance is conditional, among other things, upon the character of the Committee as finally settled. Obviously I could not consent to take the charge of a committee organized in which I should consider a wrong way. My own conception of what the Committee should be is being written down. This, after Miss Eaton's revision, will be sent to you. We found, on her short visit yesterday, that we were in accord on all the main points regarding the Committee. My final decision about the proffered chairmanship will depend largely upon whether the Committee as definitively constituted will be based upon the same principles as those of her and my plan. It is these principles, not those details of the plan which have little to do with them, that will guide me, for the principles were the very reason which inspired the idea of creating the new Committee.

I have referred to the above, for I shall answer your letter on the basis of the same principles.

They all issue from the central idea that IALA is growing to such a point where a clear and rational collocation of responsibilities is essential for an efficient and economical execution of its many-sided work. For this, a reorganization has seemed necessary; the reorganization finds its salient features in the new Finance and the Coordination Committees.

In any reorganization, it would perhaps be unwise to repeat the manner of the French Revolution, when historic institutions were wholly wiped off the slate, and totally new constitutions were framed purely on theoretical grounds, without regard to the heritages of the past. One would prefer the more practical English manner, in which fresh ideas and organs are balanced with useful survivals of historic institutions; the old are modified and incorporated into the new. I, for one, have acted in accordance with this method in framing my plan. I, therefore, welcome heartily the suggestions contained in your letter regarding the past organization of IALA.

Precisely at this point, however, it seems to me that there is a capital point on which one should be clear-eyed and steer clear of a possible confusion of thought. To say that the future should as far as possible be built upon the foundation of the past does not mean, to my mind, that every vestige of the past, no matter how obstructive to progress, should be religiously preserved. That would not be wisdom, but servitude to antiquity. As to how fatal this confusion has been *history* yields many, many tragic examples. The precious lesson

it teaches bears, I think, directly on our business of IALA. At this hour of reorganization, I pray you and every one else to be on guard not to confuse the two radically different things I have taken liberty to dwell upon: respect for the past, and slavery to it. The latter might surreptitiously take the place of the former, if one did not consciously and resolutely rise above one's personal preferences or habitual inclinations.

To be more specific, CALS and CCSR, as bodies, have been abolished, but their work will be taken over by the new Coordination Committee, for that work is the very work of IALA and must be increased in volume and in efficiency.

As the bodies of CALS and CCSR have ceased to exist, their chairmen are released. The Division of Promotion and the three sections of the Division of Research will each have a Director with full responsibility toward the Directorate, and full independence as to the direction of work to be done under him. Nothing would be more incongruous, and more prejudicial to this responsibility and independence of each director, than to place beside him a chairman. The latter would not only be superfluous but encumbering. To preserve the past chairmen would not be historical wisdom, but a case of surrender to the bondage to the past.

What has made you momentarily hesitant about the chairman is obviously what you call the non-technical duties in relation to research. As you say yourself, one should consider just what these duties are, and whether they cannot be cared for effectively by different parts of the reorganized system or whether there really are some things for the sake of which we should risk the obvious unwisdom of putting a chairman beside the director of research. Of the non-technical matters, some may be simply clerical; some, purely administrative; and the rest,—the most difficult for a merely mechanically organized body to manage,—things depending upon personalities and personal relations. The first of these three classes of affairs will create no difficulty; and the second, in accordance with the plan which Miss Eaton and I shall present, would be referred by the Coordination Committee to the Secretariat, or be managed conjointly by both. As regards the third, I know perfectly well that you have borne the brunt of its burden and thereby have contributed immensely to the general operation of research. Nothing is clearer than that the directors of research, the Coordination Committee, the Secretariat, and every person, will continue to go to you, whenever need arises, for advice and personal aid. You, in your capacity of Honorary Secretary and member of the Executive Committee and of the Administrative force, will have full and free scope to intervene,—through the channels of organized bodies, or personally where there is no constituted channel for a desired action. I fail to see the need of your binding yourself to a chairmanship of so limited a field as that of research. Your influence would be more widely and freely exerted without this burden than with it. The whole organization of IALA, in its every part, will continue

to look to you for personal inspiration and aid. I should almost be tempted to say that you will be at all times exposed to personal demands from all quarters.

Something similar may be said of the past chairman of CALS, Mr. Duggan. It seems highly desirable for IALA to avail itself in some form of the service of a man of so wide knowledge and influence in the educational world. But it would be unwise for us, and irksome for him, to put him as chairman of educational research beside the director Mr. Thorndike. IALA might well make an understanding with Mr. Duggan so as to make it possible for us to approach him for guidance and support. One might even offer him a definite place, but certainly not as chairman of educational research.

In short, in regard to yourself (items 5-7 in your letter), I would venture to say, that 5(a) and the first half of 6 were self-evident; that 5(e) and 5(g) lay between you and Messrs. Sapir and Collinson; that 7 and the latter part of 6 depended upon yourself, (your suggestion in 7 seems to me well considered); that 5(d) and 5(f) had been already decided by you; and that 5(bs) and 5(c) would cease automatically with the reorganization.

I have written this long letter with the impudence which seems gradually to have become my execrable habit in addressing you. Though I have been encouraged by your remarkable sportsmanship, I have no word of legitimate excuse, for much must spring from some callousness of my spirit. But I desire to assure you that without personal loyalty to you even that innate defect in me would not show itself in such continued liberty of expression.

I deeply appreciate your remark in regard to our association since 1924 on CCSR. For me, it has been a rare fortune in my life. I sincerely hope that the new regime will never have the effect of making our contact less close than it has been.

Most sincerely yours,

①⑨ モリス夫人-8 1930 (昭和 5) 年 12 月 2 日 [タイプ原本・イェール大学図書館所蔵]

ニューヨーク東 70 番街 19, 1930 年 12 月 2 日

[前文略——訳者]

先生は、進行調整委員会の委員長就任を受諾されることによって、IALA にとり、測り知れないほど貢献をなされることとなります。IALA の幸運の星は健在なり。敬具

ともに固いスクラムを組んで

アリス・V・モリス

Mrs. Dave H. Morris

19 East 70 Street

New York

Dec. 2, 1930.

[p. 2.]

You are rendering an inestimable service to IALA by accepting the Chairmanship of the Committee of Coordination. IALA's lucky star is not waning.

In happy co-operation,

Faithfully yours,

⑳ 朝河-12 1936(昭和11)年5月9日〔タイプ控・福島県立図書館所蔵〕

親愛なるモリス夫人

ご夫妻ともいかがお過ごしのことか、お便りせねばと長いこと気にかけていたのですが、どういうものか時間は、私にとっては、ますます速く飛んで行くように思えてなりません。この数ヵ月、不穏なヨーロッパにおられても、お揃いでご健勝のことと拝察いたしますが、いかがでしょうか。

さきに IALA の事業計画についての意見を求められまして、恐縮に存じておりますが、その後なんら、ご示唆を差し上げられなかったこと、申し訳ないと思っています。また今回とても、特に価値のあるアイデアを提供できるわけではありません——何分、ヨーロッパでの情勢にうとい現状ですから。私の唯一の関心事は、西洋のあらゆる階層の人たちが、その相互コミュニケーションに当たって、進んで使用するに足るものをこそ、IALA がその最終的な結実として提示してほしい、ということに尽きます。私は、ソヴィエト、イタリア、ドイツの三国以外には、いかなる政府もその国民に対し、使用したくない言語を強要することは出来まいと信じています。

比較的庶民レベルの人たちだけでなく、いわゆるインテリ層の人びとにとっても、その言語を使用することがその相互のコミュニケーション上、それぞれの目的——非常に広範な関心事にわたる——を達成する上に、十分に有用であるべきことを、それは意味します。そのような人たちにひろく受け入れられないようなコトバは、当然、ひろく使用されることはないでしょう。いかに当事者が躍起となって熱心に推進しても、この目的は失敗に終わることでしょう。この際、既存の補助言語の利点を、少数の人たちが言いたてようとも、にわかに信じるわけにはいきません。なぜなら、すべての階層の人たちが受け容れ得る道具として、本来的・内在的に価値を有する言語のみが、受け容れられる結果となるからです。

以上は余りにも自明なことですから、詳説の必要はないようにも思えますけれど、私があえて、それを強調するゆえんのものは、そのような良き道具は、いくつかの重要な特性を一個に結合したもの——全体としての産物が、誰にも毛嫌いされず、だれもが飛びつきたいようなもの——でなければならぬからです。愚見によれば、これらの諸性格こそ、そもそもの発端から自覚的に形成され、常時、目の前に掲示され、その準備過程のあらゆる段階において追求さるべきものであります。かくすることによって始めて、作業全体の目的を見失うことなく、またそれ自体がいかに興味深いものにせよ、そのために片寄った性格を不当に強調する結果となったり、不必要な仕事へ逸脱したり、というあやまちを避けることができます。

結合さるべき諸性格がいかなるものであるべきかは、綿密な調査と、広い視野に立った省察にまたねばなりません。これまで IALA が進めてきた、すべての教育的、言語的研究成果を再検討すべきですが、それだけでは不十分かもしれず、さらに広範囲にわたる探究が必要となることでしょう。

以下は、私が個人的に望ましいと考える二、三の特質でして——これこそ小生が筆をとった目的ですが、従ってこれらの特質は完全でもなく、多分、他の人たちにとって必ずしも歓迎されないかもしれませんが——まず第一に (1) 西洋 (主として西ヨーロッパ) 語の真正の合成物であること、次に (2)

文法の簡潔さと、語源的な自然さの、両者の最大限可能な均衡(困難な仕事ですが、真正合成物においては必須の特性であり、大多数の人たちの嫌悪をさける一つの資質でもあり、相当レベルのバランスは達成不可能事であるとは思えません)。そして第三に(3)語彙の膨張への大きな容量ないし許容性。以上のうち、(3)は(2)の副次的産物ともいえますが、必要に応じて、新語は、合成言語の大部分の利用者が容易に理解できるような、規則性をもちながら、同時に自然的な形態をもつものを、諸国語の中から、その語彙体系に追加するのがよいでしょう。

上に述べた主たるテーゼ(論題)は、あなたの送って下さったプランに関するコメントではなくて、IALA 自体の、本来の仕事に関連するもの、とお考えいただきたく存じます。

私の側からの、もう一つの熱望は、ステートメントの時期が到来したとき、提唱される合成言語なるものは、その構成要素の面からも「西洋のもの」であることを、明白に表明することです。これは単に正直だけでなく、非西洋諸国民に対して必要な配慮を示すものでもあります。とはいえ、西洋合成語の真の有用性がひとたび証明されたならば、非西洋諸国の人びとが自分たち同士の間でさえ、すすんでその良い西洋合成語を使用することになるのは、当然の^{ことわり}理といえましょう。

あなたはもちろん、その仕事達成のために必要な資金について、日夜、心を砕いておいでに違いありません。ただ、あなたは、各財団に対し、提案事業の有用性だけでなく組織体の健全さについても、相手を説得するには何をなすべきかについて——十分に——熟考されたでしょうか。私は、この問題に関しては、まさに徹底的かつ勇敢な検討が望ましいと確信しています。私など、このようなことを申す立場にはないわけですが、この程度のことすら、あえて口にする心臓を持ち合わせている人間が、果たして他にありましようか。ご容赦のほどを。

今年の夏は帰郷なさいますか。

あなたとモリス氏に心からなる尊敬をこめて。

敬具

May 9, 1936

Mrs. D. H. Morris
The American Embassy,
33 Rue de la Science,
Brussels, Belgium

Dear Mrs. Morris,

It has long been on my mind to write you and inquire how you and Mr. Morris were, but it seems time with me tends to become ever more fleeting. I hope these months, so full of anxiety in Europe, have found you both in good health and cheer.

I felt flattered to receive your letter asking my comments on the plan of IALA's work, and am sorry I have been unable to offer any suggestion to reach you in good season. Nor am I able to present ideas of any value, all the more because I have not been in touch with what has been being done in Europe. My sole concern in the whole question is that nothing short of what would *willingly* be used by all classes of people in the Occident in their intercommunication be presented as the final fruit of IALA's labor. I believe that no government, except in Soviet Russia, Italy and Germany, would be able to oblige people to adopt any language which they did not care to use.

This implies that the intelligent as well as the less cultured persons should find the language serviceable for their respective purposes in intercommunication,—purposes which would cover a very wide range of interests. A language which was not of universal acceptability to them all would naturally not be used universally, and fail of its purpose, no matter how well sponsored. What a few persons might say at this time as to what known auxiliary language was preferable could not safely be relied upon, for nothing but the intrinsic value of a language as an acceptable tool for all classes could commend it to them.

This is so obvious that there would seem to be no need of dwelling on it, but the reason I have presumed to emphasize it is that such a good tool should possess several important qualities *in a single combination*, making the whole product repellent to none but inviting to all. And it is these very qualities that, in my humble opinion, need to be clearly formulated at the outset, and to be kept constantly before the eye, and striven after, at all stages of preparation. Thus, one would not lose sight of the object of the whole work, and lapse into wrong emphasis on partial qualities or into needless work, however interesting of itself.

What should be the qualities that ought to be combined must be decided by careful survey and wide deliberation. All the educational and linguistic work that has been done so far by IALA should be considered, but may not be sufficient. Yet wider inquiries would be

needed.

Here are a few qualities I personally should desire for purely my own purposes in writing.—qualities, therefore, not complete and probably not all agreeable to other people:—(1) A true synthesis of Occidental (chiefly Western European) tongues; (2) the best possible balance between the simplicity of grammar and the naturalness of etymology, (a difficult feat, and yet naturalness is a requisite quality in a true synthesis, and is a qualification preventing dislike by a great many persons; and a balance does not seem impossible of attainment); and (3) large capacity for expansion of vocabulary. Of these, (3) will be a by-product of (2), so that, according to need, new words would be added to the vocabulary from national languages in such *regular-yet-natural forms* that most other users of the synthetic language would readily understand them.

The main *thesis* stated above is not a comment relative to the plan you sent me, but relative to IALA's own work.

Another earnest wish on my part is that, when the time for a statement comes, the proposed synthesis should be presented explicitly as Occidental in its elements. This would not only be honest, but would indicate the necessary consideration for the feelings of non-Occidental nations. It stands to reason that non-Occidentals would willingly use a good Occidental synthesis even among themselves, once its real usefulness was proven.

You must naturally be much concerned over the funds needed for carrying on the work. Have you pondered—thoroughly—what should be done in order to convince Foundations, not only of the usefulness of proposed undertakings, but also of the soundness of the organization? I have reason to think that a most searching and fearless thought of the problem would be desirable. I am not one who should say this, but who also would dare display enough effrontery to say even this little? Please forgive me.

Are you coming home this summer?

With my warmest regards to you and Mr. Morris, I am,

Always sincerely yours,

⑳ モリス夫人-9 1941 (昭和 16) 年 12 月 30 日 [タイプ原本・イエール
大学図書館所蔵]

ニューヨーク東 70 番街 19, 1941 年 12 月 30 日

親愛なる朝河博士

26 日付のお手紙および同封物をありがとうございました。昨夜ミス・

ゴードンが主人とロレンスと私の前で同封物を読んてくれました。私どもは、先生が問題に対処なさったその方法をうかがって非常に喜び、また感じ入りました。もし先生の忠告が受け入れられてさえいれば、わたしたちは別な世界に住んでいたことでしょう。神の祝福が先生の上にありますように！

敬具

アリス・V・モリス

19 East Seventieth Street
New York
December 30, 1941.

Dear Dr. Asakawa,

Many thanks for your letter of the 26th with its enclosure. Miss Gordon read the latter to Mr. Morris, Lawrence and me last night. We were delighted and thrilled at the way you handled your problem. If only your advice had been taken we should be living in a different world. Blessings on you.

Very cordially yours,

ALICE V. MORRIS

②② 朝河-13 1942 (昭和 17) 年 12 月 20 日 [タイプ控・イエール大学図書館所蔵]

親愛なるモリス夫人

特にこれといった目的があるわけでもなく、強いていえば、休暇シーズン(クリスマス)を口実として筆をとったような次第です。私はこのところ、長いこと町から足を伸ばすことがありませんでした。ですからお会いする機会もなかったわけですが、いつも、あなたのこと、あなたの幸せなご家庭のことは、思い出しております。私は緊張した生活を送っていますので(世の皆さんも、そうでしょうけれど)、それだけに、余計、とり立てて特別な用向きがなくても、友人にあいさつしたいという気持ちに駆られるのです——人生は仕事と闘争だけではなかったのだ、ということを自らに想起させるために

も。そして、しばしなりとも、そのような幻想は、ささやかな安らぎを与えてくれるように感じます。

大戦は、IALAの進める平和的事業にすら、少々の変化と、同時に真の奉仕を行うチャンスを提供したように思います。私は、ニュー・メキシコから、イートン女史のクリスマス・カードを受け取って驚きました。あなたと協力しての仕事の一部のために、その大学に来ているとありました。

去る7月、私は定年に達しました。名誉教授としての、私の1年目を大いに楽しんでおります。過去40年間、日々、中断されてきた仕事に専念できる時間を、私もとうとう手に入れたのだとの実感は、やはり心うれしいものです。

あなたとモリス氏、ならびに御一家が、時代のもたらした(われわれすべてにも同様な)もろもろの影響にもめげず、健やかでお元気でられますよう。

クリスマスの心からなるご挨拶を申し上げます。

敬具

To Mrs. D. H. Morris, 20 Dec. '42

Dear Mrs. Morris,—

This is only an idle message, with the holiday season as an excuse. I have not ventured out of town for a long time, and so have had no opportunity to see you. But I continually remember you and your happy home. Now that I live under stress, as we all do, I feel the greater desire at least to send word to friends, without any special errand, as if in order to remind myself that life was not all work and strife: even a moment of such illusion seems to afford a welcome relief.

I suppose the war has brought even to IALA's peaceful work some change and also some chance for rendering real service. I was surprised to receive a Christmas note from Miss Eaton in New Mexico, where she wrote me she was at the University for part of her work with you.

I reached the retiring age last July, and am greatly enjoying my first year as an Emeritus. It is a pleasure to feel that I have at last earned the time for devoting continuously to the work which has heretofore been interrupted daily for forty years.

I hope you, Mr. Morris, and all the family are well and of good cheer, in spite of the

effects of the times which must have come upon you as upon all of us.

With my hearty greetings of the season, I am

Always sincerely yours,

〔付記〕

本編は、「朝河貫一書簡編集委員会編・同書簡集刊行会刊『朝河貫一書簡集』（早稲田大学出版部，1990年，全1130頁）」よりの転載で，年代順かつ対訳式に再編集した定稿。その紹介と解説は，石川衛三（講演）「国際人朝河貫一の横顔——英文書簡を通じて——」（1987年12月18日，「歴史家朝河貫一の生涯と思想」講演会，早稲田大学社会科学研究所主催，於同所）に詳しい。なお，同講演内容は『幻の米国大統領親書——歴史家朝河貫一の人物と思想——』（朝河貫一書簡編集委員会編，北樹出版，1989年6月）に再録・所収。